
I.o.method

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I . o . m e t h o d

【Zコード】

Z2730P

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

打倒、ろくでなし悪女な姉を掲げて旅する白髪に褐色肌の魔女ウインズ。ひょんなことから人狼拾つて。ひょんなことから魔剣と遭遇！？

魔力ある者は永きを生きる世界で繰り広げられる、壮大なラブファンタジー開幕！

In own method

この物語は全てにおいて、ある姉妹から始まっている。

とある世界、とある時代のとある国、とある場所に彼女達はいた。一人には永きを生きるだけの魔力があり、姉は見事な金髪に金色の瞳を持ち透き通るような白い肌、妹は白髪^{はくぱつ}に黒い瞳を持ち褐色の肌をしていた。

二人は異母姉妹であった。

絶世の美貌を持つ『白き魔女』と讃えられた姉は、魔術師の中でも特異な能力を持つ妹が気に入らなかつた。

「あんたがちやほやされる国なんか、滅びちゃえばいいのよね」

国の上層部に美貌で取り入った姉は、あれやこれやと策を巡らし、一国を崩壊へと導いてしまう。

「あんた、何てことしてんの！」
「だつて気に入らなかつたんだもん」

この物語は、とんでもない悪女の姉と、とばっちりを食らつたお人好しな妹の壮大で壮絶な姉妹喧嘩である。

妹は『風の魔女』と呼ばれていた。

In own method (後書き)

『In own method (イン オウン メソッド)』 和訳
／自身の方法で。

獣人とお姫様

世の中には時として、奇怪なことが起こるものである。

それはこの世に、魔力によつて永きを生きる者が存在するようじ。それはこの世に、姉と妹がいるよつこ。

「……」

彼は無言だつた。

あたしも無言だつた。

彼は倒れていた。

あたしはそれを見つけた。

「……じゅうじん獣人？」

小鳥の囁りが清々しい緑の森の中、ばつたり出くわしたのは、行き倒れの獣人な青年だつた。

一方的に出くわしただけだけど。

あたしの咳きに、ぴく、と真つ黒い耳が小さく反応する。うつ伏せなので、顔はわからない。

わからないまま、知らなかつたことには出来まいが。

出来……ないよな。

「ちょっとあんた、獣人が森で行き倒れつてどうよ。しつかりしなさいな」

「……うーん……」

「うーんじゃなくて」

一応、意識の確認を試みる。

気配と反応からするに、死んではいないらしい。
たぶん……

「お……お腹が……」

「減つてんのね」

だと思った。

獣人なのに、どうこうア見だ。

仕方がない。

あたしは情け深いのだ。

「ほねいはんはりはとうーやはひーねー」
「何言つてつかわかない」

手持ちの握り飯を与えてやつたなら、飛び起きて食らいついた。ついでに、あたしの手もちょっとびりかじられた。

痛い。

「お姉さんありがとう…優しいね！」

「ああ、そう」

あつという間に三つ平らげた彼は、にこっと八重歯だか犬歯だか牙だかを見せて笑った。

真っ黒な瞳は、くりくりとして犬っぽい。

獣人なんだけど。

「あんた、人狼族？」

「俺、ジタン・トーチ！」

「種族を聞いてんの」

「お姉さんは名前は…？」

どうやら自由な気性のようだ。

あ、面倒くさいかも。

ちょっとぴり目眩がした。

自由過ぎる奴をよく知っている。

奴は、周りを振り回したあげくに「美人は何したっていいんだもん」とか、意味不明な利己的発言をするとんでもない悪女だけれど。

彼を一瞥した。

真つ黒い無造作な短い髪と真つ黒な耳に尻尾、真つ黒な瞳、毛並みはいい。

白い肌とのコントラストが、端正ながらも人懐こい顔立ちを際立たせている。

そしてその無垢な瞳は、きらきらとあたしを見つめていた。

「ウイ……ワインズ・ゼロムス……」

負けた、と思った。

「ワインズ……ゼロムス……？」

「……何よ」

何故か記憶を探るように首を傾げたジタンに、少しだけ身構える。

……知つてるとか？

いや、いやいやまさかね。

ただ、人狼族は長寿だ。

あの時代に生きていたとしたなら、知らないとも言いきれない。ジタンが人狼族かどうかは定かじやないが、人狼族じやなければ何なんだ。

兎族の耳でもないし、妖精族でもないだらうし……。

とにかくどうなんだといつそり観察していれば、「あつ」とジタンが声を上げた。

「ど、どうした？」

「俺、ワインズのこともわかんない！」

あ、そり……『も』？

「あんた、いくつ？」

「わかんない」

「名前はわかるんだよね」

「ジタン・トーチ！」

「さつき聞いた」

年齢なんて、あたしだってわからないわけで、大したことじやないけど。

わからないつていうか、覚えてられないいつていうか。

ジタンをしげしげと観察する。

たぶん、人狼族。

外見年齢は二十代前半程度の青年まで成長しているから、人狼族の寿命や成長過程から考えても、最低で見積もって百歳以上かと思う。人狼族は森なんかでは、そう珍しくもない種族だ。

ただ、いつも混じり気のない真っ黒な毛並みは、永く生きてゐるあたしでも、見たことはない。

獣人と呼ばれる種族達は、太古の昔からこの世界にいた者達であり、少なくなつてしまつた妖精族と比べたなら、まだまだ数多く存在しているのだ。

ただ彼らは、人間が多くの大を支配するようになつたことで、純血交配が難しくなつていつた。

人と交じり、人に混じり、純血種自体は希少となつてゐる。

簡単に言えば、外見もカラフルになつてきてゐるわけだ。

つまり、ジタンが純血人狼であれば、かなりな希少価値があるわけだけど……。

「ジタンは、いつからなら覚えてるの？」

「うーんと……あ、ちょっと前に、洞窟で氣がついたところから…」

あつからかんと笑うジタンの言葉に、少しだけ、眉をひそめた。

洞窟で氣がついた。

つまり、洞窟で覚醒した可能性がある。

そうなれば、記憶がないのもわからない話じゃない。
まさか、永きを渡つて眠らされていた？

「どうしたの？お腹空いた？……俺、全部食べちゃった？」

……「ジの子が？

きゅーん、と耳をへたれさせるジタンに、「え、何で？」と首を捻つた。

でも、何か、何か、

「その洞窟、連れてつてくれない？」

何か、見捨てられない性分なんだよなあもう！

お人好しつていうか、子犬みたいな瞳に弱いつていうか、何でこうもあたしは、あの姉と違うのか。

同じには死んでもなりたくないけど。

「いいよー」とあっさり了解したジタンから、ばふんつ、と煙が上がった。

「やつぱり人狼か」
「背中に乗つてー」

虎くらいはあるだろう真っ黒な大狼に変化したジタンが、ふりふりと尻尾を振りながらペたりと伏せのポーズを取った。

それにして、人懐こいにもほどがある。

人狼族とはプライドの高い種族だ。

気に入った者としか話さないし、背中に乗せるのは主と認めた者だけだと聞く。

記憶がないとはいって、こんなんで大丈夫か。

自分とは関係ない不安に苛まれつつ、せつかくの厚意と好奇心から、ふさふさの背中に乗せていただくことにした。

あ、毛並みがいいから、ふさふさの格が違うー。
ふわふわのもふもふだ！

うつとりとしたあたしをよそに、ジタンは、風のようにな森を駆けていった。

縁を抜け、地を蹴り、到底人では出せないスピードで風を斬るジタンは、あつという間に例の洞窟に到着して見せた。
流石は人狼族。

歩いてなら、半日は掛かるだろう距離だ。

「すいね、ジタン」

頭を撫でてやつたら、えへへ、と嬉しそうにまた尻尾を振つて見せた。

周囲をくまなく観察する。

洞窟を中心に、円形に木々がそれを囲み、中心から木々までの半分の位置には、やはり中心を囲むようにぐるっと石碑が立てられていて

る。

五芒星魔法陣か。

一つの石碑に歩み寄つてみたなら、風化が激しかった。手入れはされておらず、所々に蔓が這い苔蒸している。

星の角数は、多いほど効力は高い。

ただ、自然と石碑を媒体としているなら、その効力は単純に考えても1・5倍になる。

後は術師の能力の問題だ。

石碑を見て回れば、それぞれにも五芒星が刻まれており、斜めに黒ずんだ署名が走り書きしてあった。

「これ、誰の名前かわかる?」

まだ大狼なままの後ろに控えていたジタンは、くうん、と一鳴きして首を捻つた。

やつぱり、わからないか。

「その黒くなつてゐるの名前なの? だいぶ古いみたいだけど、血の匂いがする」

「人間の匂い?」

「違つ」

それぞれ体臭があるように、種族によって血の匂いも違う。ジタンの鼻が違うというなら、間違いないく、人間でない者の血名けつめいだ。

「これは魔法陣なの。その上に血名を書くことで、ここは完成されてる。他の石碑も嗅いでけてくれる?」

「また撫でてくれる?」

「もちろん」

どういった理由で魔法陣の中心に洞窟があるのか。やはり、ジタンは封印されていたのか。

何故か。

知ることが全てよしとは限らない。

でも、それがわかれば、あの子の種族の集落を探せるかもしねり。

何もわからないのは、きっと、不安だろうから。

洞窟の前まで移動したとき、早くもジタンが駆けてきた。

「あのね、全部人間じゃなかつたよ! でね、皆違う人だった!」

違う人?

頭を出してくるジタンを撫でながら、もう一つ 洞窟前の石碑の

血名を曰にして、あたしはむかつ腹が立っていた。

血名はほぼ風化して読めたものじゃない。

刻まれた魔法陣の溝に、黒ずんだものが溜まつて固まつているだけだ。

わかってる。

これは、ただの勘。

でも、この抑えきれないむかつ腹が立つときは、よくよく知つてい
る。

「この石碑の血も嗅いでみて」

「どうしたの？ ウィンズ、怒つてん？」

「勘違いなら落ち着くと思つから」

14

数回、ひくひくと鼻を鳴らしたジタンが、ひょいとあたしまで嗅ぎ
出した。

「違うナビ、ウインズと似た匂いがする
「やつぱつー」

ジタンの顔が僅かに歪み、「腐った林檎、知つてる」とか何とかぶ
つぶつ言つていたが、あたしはそれどころではなかった。

ほぼ原形を止めない血名からでも、あたしは奴がわかるのか。
まさしく、これぞ血の絆と言つべきか否か。

「せっかく背中に乗せてくれたのに、ごめん。先に謝りとく」
「何が？」

すぐに明るいあっけらかんとしたジタンに戻り、それにつづくと、胸が痛んだ。

「あなたはたぶん、ここに封印されていた。理由はわかんないけど……たぶん、状況からして、かなり永く」

ジタンの顔が見られない。

少なくとも、この子の時間を奪つてしまつたはずだから。
この子が過ごすはずだった人達との時間を。

そして一番許せないのは、

「Jの最後の血名　あたしの姉のものだと思つ」

最低にして最強の悪女、『白き魔女』。

厄介なことにJの悪女は、正真正銘、あたしと血の繋がつた姉だ。

「へー、お姉さんなんだ！」

なんだ！って……。

ぽかんとしたあたしをよそ、「へー、へー、としきりに嬉しげなジ
タン。

「お、怒らないの？ あたしの身内（あいじない）が、あんたを……」
「やつぱり、ウインズは俺の（あるじ）様だね！」

「やつだよね、そりだと思つたんだ！」とか何とかかんとか。
はしゃぐジタンに、より、ぽかんとした。

全然、わかんない。

「主様と出合える」とは、すごいことなんだつてーーこの世界は広
いから、なかなか出合えないんだつてーー

「それ、人狼族の……」

人狼族は主と認めた者しか背中に乗せない。
話さない。
懷かない。
懷かない……な、懷いてた……。

「懷いてた

！――！――！

「すぐわかったよ、俺すごい！」

ふみふみと可愛らしく懐きまくつてゐジタンに、思わず、頭を抱えた。

何が！？

何で！？

何がどうだったわけで、いつから何故にあたしが主様だと！？

「たぶん、間違いなく、あんたの時間を踏み躡つた張本人の身内だよーもっとよく考えて！」

まるで聞いてないジタンの尻尾はふりふりだ。

嬉しくて仕方ない雰囲気が、そこかしこから滲み出てる。

「だつて、わかるの」

「どうやって」

「野生の勘！」

どういう継承の仕方してんだ！

そりやあまあ、人狼つてくらいだし、本能的な勘は人間に比べたら何倍も優れているに違ひないけど……。

「あのねー、ウインズ」

「とにかく、主様云々は置いとくとして、」

いつの間にか、ジタンは人型に戻っていた。

とにかく今は、一応、洞窟の中も確認しておくに限る。

あのろくでもない姉が、あたしにわかるよう、わざわざ血名を残しておいた辺りから察するに、明らかに嫌がらせとしか思えないけど。あいつが血名を必要としないほどの魔術師であることは、重々承知の事実なのだから。

とか、うんうん考えていた瞬間。

ちゅ。

額を取られ、目の前には、黒で縁取られた睫毛があった。
ちく、と、左手の甲に走った痛みと共に。

し
ん。

ちぢぢ、と小鳥の鳴り声がする。

さわさわと、緑の葉擦れの音がする。

触れた唇は少しだけ啄むように確認され、すぐに離された。

し
ん。

「俺のお姫様」

し
ん。

いー・やつぱりー・勝手に契約の儀を結

「お、お姫様じやな
んだな！」

「だつて俺のお姫様」

案の定、軽く痛みの走った左手の甲には、古代人狼語で『汝、我が
主として此処に絆を印す』とある。
勢いよくジタンの左手の甲を確認したなら、同じような印が浮かん
でいた。

「何をやつてんの……
「洞窟は見ないの一？」

脱力するあたしを気にすることなく、また、自分を封印しただらう
身内であることも全く気にせず、つきつきなジタンは、早く早くと
背中を押して急かすばかりだった。

やつぱりこの子、すぐ心配。

こうしてあたしは、全く意志とは関係なく、ジタンの主様とやらこ
なつてしまつたわけだ。
何がどうこうわけだ。

仕方ないことは仕方ない。

今は取り敢えず、洞窟も確認すべきだった。

洞窟、といふか人一人入れる程度の石の祠といったところか。つまりだ。

「やつぱり。どこかに通じてる」

3メートルほどいったところで石の壁に突き当たる。
実物は、これでおしまいといふことだ。
この先に……ああっ！？

「ぐ、崩れてる！」

いかにも魔力で封印してます的な石壁の一部が、大きく崩れていた。
見たところ、あたしじゃ解析不能な魔法陣が描かれている。

しかも、崩れてるのは真ん中。

残された残骸には、また誰かの血名の痕跡。

「あ、あのねウインズ」

「……何」

座り込んで残骸を手にすくめた。あたしは、恐る恐る、ジタンが口を開いた。

「俺、あの……」口から出でたのは、覚えてて……あの、」

見上げたなら、へたりとした耳は、ふるふるとしていた。

「あの……お腹、空いてて……そー、寄つ掛かっちゃって、く……崩れ、ちやつた……」

「めんなさい」と小さく言つて、隣にしゃがみ込んだくづくの瞳が、うるうるとあたしを映していた。

お前か。

無言で残骸を田の前に差し出せば、素直に、すんすんと匂こを確認する。

「さつき嗅いだ人達の誰か?」

「…………違つ」

もつ泣き声をもつむ。

これは流石に……怒れない。

ぽんぽんと頭を軽く叩いてやれば、一瞬にして、花が咲いたかのように笑顔になつた。

「ワインズ、だいすきーー！」

「はいはい」

溜め息が出たけど、よしよしとまた撫でてやつた。

ぎゅうぎゅうと抱きついてくるでかいガタイを引きずりながら、どうにかこなして外に出る。

この短時間で、ジタンの扱いには慣れたらしい。

何はどうあれ、この子の過去には、あいつが絡んでいるのだ。
面倒見るしかないじゃないか。

せめて、謎が解けて、自分の在るべき場所へ帰れるまでは。

結局あたしは、とんだお人好しなのだ。

「ジタン、行く宛てはあるの？」

「ワインズといふ！俺のお姫様だから！」

「……ああ、そり」

ちゅっぴり遠い田をしながら、やつぱりね、と畠を落とす。

「じゃあ行くか

「背中に乗る？」

「よろしく」

ぽふん、とあがった煙に、小さく笑った。

お姫様ではないけれど。

飯屋にて

街が見えたのは昼下がりの午後だつた。

「どうか、ジタンを見つけたのが昼前だつたことを考えると、洞窟を調査した時間も踏まえて、あり得ない速さで森を抜けたことになる。」

一応あそこは、新たにあたしが魔法陣を張つたので人目にはつかないはずだ。

「そろそろ降ろして」

「街はすぐそこだよ」

「だから、変化を解いて入るうね」

やつぱり、そのまま入るつもりだつたか。

「あのね、もうちょい警戒心を持ちなさい。あんたはビリやら純血種らしいから、大狼の姿だといろいろ危ないの」

「ふうん。わかつた！」

「素直なのはいいんだけど、ビリもなあ。本当にわかつてんのか。」

「ほふん、と人型に戻つたジタンが、にこにこしながら無理矢理腕に

絡みつく。

またか。

「そんな心配しなくても、あたしは大丈夫だから」

「魔術師だから？」

「まあね」

せつて張り直した魔法陣を見てただろうから、魔術師と田星をつけたらしい。

その程度の思考回路があつて安心する。

突拍子のないところばかりが目立つ気がして、まだまだ心配は拭えないけど。

「ウイーンズは、珍しい魔力を持つてるんだねー。風を使えるんだ」

せりつと投げられた言葉に、ぎょっとして田を見張った。

「何でわかんの！？」

心底びっくりしたのだ。

それに連動して、足はぴたりと止まっている。

きょとんとした端正な顔が、逆に、疑問符を飛ばしていた。

「何でって、ウインズは主様でお姫様だから」「は？」

負けじとあたしも疑問符を飛ばす。

あれ？とまたまた疑問符を飛ばしたジタンが、一応とばかりに説明を口にした。

「さつき契約したでしょ？あれやると、主様のだいたいのことがわかるんだ。繫がつたってことだから」

「繫がつた？」

絆したとか、そういうこと？

と、またまた疑問符が飛んだところで、その無垢な笑顔に似合わないあらぬ発言があたしに放たれた。

「セックスしたみたいな感じ！」

し
ん。

「どこでそんなん覚えた！？」
「知ってるよーだつて一応大人だもん」
「やだ！ジタンがそんな言葉を吐くなんていやだ！ふわふわで無垢できらきらしてるのに！」

あんなに素敵な毛並みで、笑顔だつてそりや もつ無垢で、くちくりの瞳はきらきらで、容姿だつてそりや もう美少年そのものなのに！
青年だけど！

成長過程からしたら、青年くらいなんだけども！

身長だつて普通より高いくらいで、あたしより全然高いんだけども！

ていうか、そんなこと覚えてるくらいなら、もうとこう、必要なこと覚えてて欲しい！

「じょうねーウインズ」

「何を言つてんだあんたは」

見掛けに騙されたが、曲者かもしれない。

結局、がつちりぎゅうぎゅうと腕を放さないジタンを引き連れて、「すげえバカッフルもいたもんだ」とか見知らぬ人にこゝそと言わながら、ようやく、一軒の飯屋に辿り着いた。

バカッフルって死語じゃないので？
あ、涙に瞳が負けてしまいそう。

年季の入つた木製のドアを開けたなら、カラソカラソ、と錆ついたベルが小さく鳴った。

「こりつしゃーい！……て、ワインズじゃない！」

「久しぶり、ターニャ」

昼飯時を過ぎて落ち着いたらしく店内でテーブル拭いていた彼女は、素つ頬狂な声で出迎えてくれた。

彼女はターニャ・イザベラ。

金髪碧瞳の見田麗しい、この飯屋の女主人だ。そして、旧友でもある。

「落ち着いたとこ悪いけど、飯食わせて……ターニャ？」

ターニャの碧い瞳は、あたしを見てはいなかつた。

「……また、珍しいの連れて。あんたのダーリン？」

「この子はちが」

「ジタン・トーチ・ワインズのダーリンになるのー！」

否定は呆氣なく遮られ、またもジタンはすき勝手にぼやしてくれた。

ダーリンとか、知つてんだ。

無理矢理ジタン剥がして、何とか席に座る。隣に座ったジタンは、ずっと上機嫌だ。

おとなしくしてくれるなら、この際、何でもいい。

「あたしは豆腐サラダと牡蠣グラタンとアイスコーヒー。食後にアツプルパイね。ジタンは？」

「うんと……知らないメニューばかりだなー。あ、カツ丼と親子丼とハンバーグの卵焼き乗せといんげんと卵の和え物がいい！後ね、バナナシェイクは知ってるからそれにするー！」

卵ばっかりだ。

それにしてよく食いつ。

少し、仕事を増やすべきだろ？

メニューを伝えに行つたターニャの背中を眺めて、ジタンはここにこしていた。

「ワインズの大切な人なんだね」

「それもわかるんだ」

「繋がってるから。ワインズの気持ちが伝わってくるんだよ」

あたしにはわからないんだろうか。
何て一方的な絆だ。

「ワインズは……俺のこと、嫌い？」

うるうると捨てられた子犬のような瞳で、またも攻撃を受ける。

“やつやつあたしは、この瞳に弱いからこそ。

「嫌いじゃないよ
「ウインズだいすきー！」

椅子を蹴散らして飛びついてきたジタンに、はあ、とまた肩を落とした。

食前に運ばれてきたドリンクを前に、厨房を任せたらしきターイアが席に加わる。

「で？ダーリンじゃないことは、どうこいつ経緯があつて連れてるの？」

ホットティーを優雅に啜りながら、にこりと極上の笑みを浮かべる。述べる、と、その笑みには威圧感が含まれていた。

「拾ったのよ、さつき」

「警戒心の強いと言われる人狼族を？」

まだ何があるだろ、と、笑みは凄みを増した。

「お腹が空いて、行き倒れてたんだ。ウインズがご飯をくれて、助

けてくれたの」

空氣を読む能力があつたのかと、感心する答えた。

洞窟云々は、言つ必要はない。

うつかり口を滑らせよるものなら、ビリであいつの耳に入るか、わかつたものじやないのだから。

ちなみに。

ジタンの態度は、全く空氣を読めてない。

未だ、あたしにひついたままだ。

ちやんと座れと言つたなら、ぴたり隣に椅子をくつてきて座つた。

ふつと、とあやしげに田を細めたターニャが、あたしの左手に視線を留める。

手持ちのグローブに術を掛け、契約の印は端田ではわからな^{フースター}いよう

にしたつもりだ。

もちろん、ジタンの左手にも、同じものを嵌めさせた。

「それ、手の甲に魔力增幅石^{フースター}が嵌めてある特注品よね。なかなか手に入る品じゃないのに、さつき拾つたジタンに片方あげたの?」

……しまつた。

そこまで頭が回らずに、手持ちで急いで術を施行したのでつかり

していた。

ターニャが言う魔力增幅石^{ブースター}とは、かなり貴重な鉱石を使って作られた代物だ。

これ一個で、それなりな新築の一般居住用の家が五軒ほど建つ。しかも、あたしの持っているこれは、自らの魔力を封じ込めた特注品だった。

何でこいつは、こんなに鋭いのか。
いや、あたしがかなり焦っていた証拠か。

ぱんっと手を叩いたターニャは、恐ろしいほど、壮絶な笑みを浮かべた。

「食事は部屋で取りましょう…心配しないで、ついでに面もやつてるから」

溜め息は深かった。

ジタンは心配そうにあたしを覗き込み、ついでにばかりに、口元をペロリと舐めやがった。

「パーヒーって苦いね
「苦いよ、本当にもう」

あたしのペースは、乱されつ放しだ。
引っ立てられるように部屋に連れられ、ぱたん、と無情にもドアは

静かに閉められた。

かちり、と小さく錠の落ちる音がして
に魔法陣を描いた閃光が走る。

バチバチッとドアの内側

術まで施行して見せるとは。

もともとターニャは、過去、同期の魔術師だった。
いわゆる一流と呼ばれる魔術師であり、同じ仕事を請け負うことは
ショッちゅうだったのだ。

「ターニャも魔術師？」

「そうよ。結婚して引退したの」

これだけの美人なら引く手あまただったのに、ターニャが選んだのは、飯屋の主人という平凡な男だった。

まあ、気持ちはわからないでもない。

能力や肩書きをひけらかして容姿しか見ない奴らに、辟易していた
のは知っている。

「『』主人は？」

「もうとっくに死んだわ。普通の人だったからね」

ジタンは軽はずみな言葉に、あ、と小さく漏らした。
みるみる悲しそうな顔になるジタンに、ターニャは笑った。

「気にしてないわ。選んだのはあたしよ」

「『』『めんなさ』」

「……いい子ね」

ターニャは静かに、微笑んでいた。

隣で落ち込むジタンの頭を、ゆっくりと撫でてやる。

「『めんなさ』」と、小さく、消え入りそうな声が耳を打った。そのままあたしに移された視線は、打つて変わって、威圧的だ。明らかに好奇心混じりで。

「ジタンと、契約を結んだわね？」

「流石、才女と謳われたターニャ・イザベラ」

完全にお手上げだった。

「俺が、勝手にやったんだ！ ウィンズは悪くないんだ！」

何をどう思ったのか、あたしを庇つよつに間に入つてジタンが叫んだ。

感情の機微までは、どうやら理解出来ないらしい。

よしよしと宥めてやれば、結局また、思い切り抱きつかれてしまつた。

手間の掛かる犬を拾つたもんだ。

「……ずいぶんと懷いてるのね。わざと拾つたんでしょう?
「まあ、そうなんだけね」

よく、犬にとつて一瞬は一生の恩と書つが、あれと似たものだろう
か。

一生は……どうだらう。

困り果てたあたしに苦笑いしたターニャが、優しく、ジタンに話し
掛ける。

「ジタンは……契約がどういうものか、わかつていて施行したの?」

それは、あたしも気になつっていたことだつた。

『契約』とは、強く望んだなら、ある程度の魔力があれば施行可能
な術である。

施行の仕方は種族や術者によつて異なり、現れる印やその場所もま
た様々だ。

どういつた契約内容かにより異なるが、基本的には、自分より魔力
が下回る者を従えるために施行する。

ただ、ジタンに関して言えば、魔力自体は明らかにあたしが上回つ
ている。

それくらいは魔力があれば、自ずとわかるのだ。

つまり、ジタンが施行した契約は、人狼族独特的の術であると言える。事実、あたしはジタンの主であると印されているのだから。

契約の印に、偽りはない。

「一生、ワインズはあなたの主であるということよ。あなたは、それがどういうことか、わかつている？」

続けたターニャに、ジタンは真っ直ぐ見つめ返した。

「わかるんだ。ワインズは俺の主様、俺のお姫様なんだ」

あまりに真っ直ぐ言われたからか、ターニャでさえ、呆気に取られてしまっていた。

お姫様とかはつきり言われて、よく噴かないなあ、ターニャ。
あたしだったら、旧友がお姫様呼ばわりされたら、たぶん噴くと思つた。

しまいくじ。

「　ぶふつ、あは、あはははーごめーんーだって、ワインズが
お姫様つて……！あはははー！」

やつぱり噴いたか。

いかにも女らしいターニャと違つて、褐色の肌に真っ黒な切れ長の瞳、真っ白なロングをつぱりと高く一つに纏めているあたしは、どう転んでもお姫様とはいかない。

身長だつてジタンよりは低くとも、小さいわけではないのだ。

「ワインズは綺麗だよ！綺麗なお姫様だもん！」

そこで剥きにならなくていいから。
もう聞いて恥ずかしい。

「つまり、ジタンのお姫様なわけだ」

にやついたターニャの言葉に、何を思ったのか、ジタンは急に花の咲くが如くの得意な笑顔を浮かべた。

「俺のお姫様だよ」

「もうやめてください本当に」

聞いてるだけでぐつたりしたあたし、二人の笑い声だけが響いていた。

結局、主になつた理由は、あたしには見当がつかなかつた。やつぱり恩てやつだらうか。

主云々は、ターニャの中で納得がいったらしい。わからないのはあたしだけだ。

それはそれとして。

「まだ何かある？」

「あるわね」

陣を解かないとはつまり、そういうことだらう。

思わず飛び出た溜め息は盛大で、それにつけられて、肩の上下も激しかつた。

ターニャは旧友、その中でも、最もと言つても過言じやない。

彼女は、あたしの全てまでいかずとも、現在に至る根源を知つている。

「まだ、『白き魔女』を探しているの？」

「まあね」

あいつのしたことは決して許せるものじゃない。

そして今なお、どこかしらで善悪の判断なく、思つがままに周囲を混乱させていに違ひないのだ。

やばい、またむかっ腹がぶり返してきた。

「あいつはね……あいつは、『最高の魔術師』と謳われたあのスピカ・トライウスと肩を並べるほどの美貌とか言われていい気になつてんのよー。スピカだつて、そりやあたしは気に入らないけどね！？わかる！？でもあの女は『美人は何してもいいじゃん』とか言って、意味もなくただあたしへの腹いせに一国を滅ぼしちゃうようなばかたれなの！ばかたれもいいところのよー放つとけないでしょ！？ばかたれな上に美人で悪女なんだからー！」

はあはあと息切れよろしくまくし立てたなら、ジタンもターニャも、皿をまるくして固まつていた。

「ま、まあ、落ち着いてウインズ」「落ち着けない、あれが姉だと考へると、あたしは……落一ちー着一けーなーい！！！！！」

ドガ
ン！

「はあっ、はあっ、ちょっと落ち着いた……あ、やべ

自分で魔力を暴発しておいて、咄嗟に防御陣を発動するとは、あたしもなかなかやるもんだ。じやなくて。

部屋中、見るも無惨に瓦礫の山と化していた。

魔力增幅石が反応して光ってるってことは、ジタンにも同じように戸防衛陣が発動してるから大丈夫だわ。

「けほつ、これがウインズの『風』？」

やつぱり。

ターニャも大丈夫だろうけど……

「…………ウインズ…………」

「あ、よかつた。ちゃんと防御陣発動したんだ。部屋もほら、あんたの魔法陣で外への被害は免れたね！流石、才女と謳われた…………」

あ、やばい。

「ウインズ

「…………！」

「『めんなさい

「…………！」

ドガ

ン！

ターニャの激昂により、部屋はまる焦げになつた。

「げほほほほっ……」れはターネヤのせこだからねー。

「あなたのせいだ！」

あたし達のあまりの激情ぶりに、ジタンはただ、片隅で去えていた。

「…………」

祈り

「ちょっと休憩行ってくるからー」

あの後。

結局ターニャに逆らえず、この飯屋で、せっせと修理代を稼いでいる。こんなことをしてゐる場合じやないけど、動くための手掛けはゼロだ。

「ありがとうございましたー！ターニャ、俺も休憩していい！？」

昼飯時を過ぎた店内を見渡し、ターニャが笑顔で頷くのが見えた。思わず、体が固くなる。

「ジタン、待つてゐるから焦らない……でー。」

「ウインズ！」と満面笑顔で駆け寄ったジタンに、正面衝突よろしく抱きつかれた。

痛い……だから、焦らないでって……。

抱きつくところ、もはやこれは、タックルという名の攻撃に近

い氣がする。

「あたしは主じやないのか……」

「主様だよ、お姫様」

「……わかってない」

寧ろあたしがわからない。

押し倒された格好で溜め息を吐くのは、お決まりになってしまった。それでもジタンの頭を撫でてやるあたしは、何でお人好しなんだろうか。

まあ、嬉しそうだからいいけど。

そうは言つても、悪いことばかりでもない。

人に触れることで、ジタンは少しだけ、今の時代に慣れつつある。もともと人懐こいのと美少年面も相まって、今では、この飯屋の看板だ。

ただ、仕事が決まったときの最初のひとつには驚いたけど。

「俺、ワインズのこと以外に興味ないからしない」

これには、流石のターニャも固まつた。

「だつてワインズにはやることがあるんでしょう？　ワインズがしたく

なにことをする必要はないよ。ワインズ以外の人の命令は聞かない

つまりだ。

ジタンの言い分によると、世界で一番大切なのは主であるあたしだ
といふことらしい。

よって、ジタンの中では、あたしがやりたいことが優先であり、嫌
々なことはする必要さえないと。

そして、あたしがやらなければ、もちろん自分もする必要はないと。
わかるよひでわからないといったら、ある意味理に適っているといつ
か。

「ジタン、やりたくないわけじゃないんだよ」

「ワインズ、そのお仕事やりたいの？ワインズがやるなら俺もやる
」「いや、まあ、ジタンはすきにして構わないけど」

もともと、あの騒動にジタンは関わっていなかつたのだから。
と言う前に、ジタンが口にした科白は、またも、あたしの脳天に衝
撃を与えたのだ。

「ワインズは俺の世界だから、ワインズの言つことが全て」

花の咲くような無垢な笑顔で。

以来あたしは、自分の言葉に注意を払うようにしている。

主であるあたしが気を遣うなんて笑えるけど、それでジタンがいろいろなことを学び取る機会に恵まれるなら、やっぱりそれは、いいことだ。

「お人好しだなあ」

自覚するほどに。

休憩に入ったジタンに連行されながら、少しだけ、本当に笑ってしまった。

飯屋の裏手にある縁側に一人で座り、一息つくべく煙草をくわえる。ぱちん、と指を鳴らした先の火を点ければ、ふわふわと煙が昇った。いそいそとお茶を持ってくれたジタンを讃めて、その笑顔を肴に空を見上げる。

「ウインズは煙草吸うんだね」

「ん」

魔術師は大抵吸うんだよ、と言えば、どうして?と返された。

「永いときの一瞬の暇潰しかな」

人狼族のように、種族の全てが長寿というなら、感じ方はまた違うのかもしない。

ただ、永きを生きると言つても、あたしは人間だ。

普通に生まれていたなら。

同じときを歩めたなら。

普通の人間を伴侶に選んだターニャなら、少なからず、そんな葛藤があつたんだとあたしは思う。

人狼であつても、同じ選択をした者なら。

「魔術師で、魔力があつて。ウインズは、それが嫌なの？」

隣の黒くも無垢な瞳が、悲しげな色を湛えて見つめていた。

「嫌じやないよ。ただやつぱり、見たくないものも増えるかな」「例えば？」

この子はどこまでも無垢だ。

それが記憶がないせいなのか、はたまた、本来生まれ持つたものなのか。

あたしにはまだ、わからぬけど。

例えば。

「例えば、国が滅びるのを目の当たりにしたり。例えば、大切な人が先に逝つてしまつたり。例えば、魔力故にそういう手伝いをすることになつたり」

それは、例えばの話なんかじゃないけど。

「煙草を吸うとね、そういうことを思い出すの。自分の小さや、とか

何も出来なかつた無力さや、抗えなかつた不甲斐なさ。
そんなものが、立ち上る白煙の向こうに見える。
そんな気がして、ときには古傷が疼くけど。

「忘れちゃいけないんだよ」

忘れてはいけない。
刻んでおかなければならぬ。

乗り越えて、前を見据えて進むため、生きるために。

「生きてるんだから」

「生きて、る」

「そう」

ジタンは静かに聞いていた。

きっと、あたしの気持ちが伝わっている。

主のそれを理解しようと必死なのが、顔に出ていておかしかった。

大丈夫、きっと二つかわかるから。

祈りを込めて、あやすように優しく撫でた。

ふわふわとした黒い毛並みは、するすると肌に馴染む。
気持ちよさげに田を細めるジタンは、素直で無垢で、可憐うしい弟
のようだ。

「いいこともあるんだよ」

「こここと? 何何?」

ぱあっと明るくなつた顔にて、ジタンが忘れないよひて、じっかりと
伝わればいい。

「ジタンと出会えたのは、永く生きてたからでしょ」

そしてまた、理由は何であらうと、個々である限り、それは唯一。

誰であろうと、何であらうと、個々である限り、それは唯一。
唯一を大切に思える。

「誰でもいいと、それは唯一。ジタンもあたしの唯一だよ」

「唯ー元気で、そう思つてじが出来る。

代わりは効かない。

ジタンはジタンで、あたしはあたしだ。

これだけは云わればと、ただ、消えていく河の岸壁に祈った。

その日、給料日に発表されたターニャへの借金が半分になつたのを事実に、あたしは浮かれていた。よつて、ジタンも浮かれていた。

予期せぬ嵐は、そこまで来ていたのに。

「ようやく半分か」

「俺がんばった！？ 誓めてくれる！？」

「がんばったがんばった」

ジタンに出会つて一ヶ月、『ようやく』の甘えた小僧にも慣れ、ついでに仕事も慣れてきた頃。たまの休みに本来の仕事でもしようかと、あたしとジタンは、街の中央図書館に向かつっていた。

この街には膨大な量の本が貯蔵してあり、魔術師間では知識の宝庫とまで呼ばれている。

図書館は中央、東西南北と五つあり、中でも、中央図書館は近隣に名を轟かすほどの貯蔵量だ。

治安もよく、魔術師は聖職者同様、崇拜の対象ともなつている。

同時に畏怖の対象もあるが、それは仕方ないことだった。

「図書館があ。俺、初めて行くよ

「あの洞窟の魔法陣について、載つてるかもしれないからね」

隣接する森の情報だ。

大した収穫はなくとも、欠片程度は知ることが出来るかもしれない。

「俺のために！？」

「ウインズが俺のために、ウインズが俺のために」と呪文のように唱えるジタンに苦笑しながら、絡みつくでかい子を引きずつて歩いていた。

立派な中央図書館に到着したなら、あまりの立派さに、ジタンはぽかんと大口を開けていた。

「やめなさい」

美少年面が台無しだ。

そもそも、ジタンには知識と教養が大幅に欠けている。

いくら永い時を封印されていたといえ、人狼族ともなれば太古から続く由緒ある獣人族。

永きに渡つて培われた知識と誇り高きプライド、野性味溢れながらも洗練された教養があると、もっぱらの噂だったはずだが……。

「ねつ めーこ」

欠片も見当たらぬ。

外見は青年でも、中身はまだまだ少年だ。
それはよろしくない。

そり、うつかりといえ、あたしがこの子の主となつたからには、教育を施す義務があるのだ！

「ジタン、よく聞いて
？」

「……」

……ばかりぽい。

「……」

「あんたは、勉強をしなさい」

「勉強？」

「そり、あたしが片手間で教えてあげるから」

如何にも体で覚えるタイプだが、上手く教えれば、それなりに身につくはずだ。

基礎がないだけでばかじやない。

それは、一ヶ月で何となくわかつていた。

そしてあたしはこの一ヶ月で、ジタンの扱いもわかつてきたのだ。

「がんばつたら、こ」褒美あげちゃおつかな」

「こほうび……！」

顔の前に人参をぶら下げればいいと。

ジタンはそれはがんばつていた。

もともと共通語を読めるばかりでなく、何と彼は、人狼語はあるか
古代人狼語までもを読み書き出来たのだ。

三時間足らずで兎族、狐族、鹿人族語の基礎をマスターしたことには、流石のあたしも感心を通り越して脱帽した。

おばかに見えておばかじやなかつた……！

「えらい、えらいよジタン！」

これでもかと撫でつけてやれば、それは嬉しそうに喜んでがんばるものだから、また輪を掛けて誉めてやる。
完全に親ばかな気分だ。

「よくもまあ、するすると覚えるもんだね」

あたしでさえ、異種族語を覚えるには苦労した。
たつた三時間程度でこれだけ身につけられるなんて、天才としか思
えない。

感心して見ていれば、ジタンは笑つてこいつ言った。

「これ全部、ウインズが知ってる」とだよね」

頷いて見せれば、やつぱり、と何故かばつ悪そつと頭を搔く。

「ウインズが知ってるから、覚えるのが早いんだよ。繋がってるか
らだと思つ」

なるほど。

契約とは、そういう共有の仕方もあるのか。
とはいって、本当にばかならしい今まで出来ない。
といつことばだ。

「魔術も……覚えることが出来る、とか?」

腐つても人狼族。

しかもジタンは、純血種だ。

契約の儀を施行したことから考えて、魔力皆無なわけはない。

「出来ないことはないと思う。ワインズが魔術師だから。でも、全部は出来ないかも……」

伏せることなく真っ直ぐにあたしを見て、その黒が、あつという間にうるうると悲しげに潤んでいく。

どうやらジタンは、とにかく、あたしの期待に応えられないのが心底悲しいらしい。

これもまた、一ヶ月でわかつたことだ。

だからあたしは、

「無理はしないでいいから。ジタンは充分いい子だよ。がんばって
るし、あたしは充分嬉しい」

ひたすら誓める！

誓めて誓めて、誓めきりつて育てるのだ！
そして、ひたすらに撫でる！

本当の親みたいな気分になつてきた。

……それもどうなの。

「取り敢えず、魔術の歴史と基礎だけは読んで覚えようか。これら
ら、あたしも知つてることだし覚えられるはずだから」

「うん！」

元気よく返事をしたジタンに笑みを浮かべ、本を手渡してから、あ
たしはあたしのやるべきことを探しに席を立った。

今あたしのやるべきことは、取り敢えず、ただ一つ。

『歴史』と掛けられた本棚を見上げ、重厚を漂つそこへ、挑むように
足を踏み入れた。

人狼族の歴史、アギズス森林の歴史、アルジア国記、アルジア伝承
記。

目ぼしい本を片つ端から取り出して目を通す。

薄暗い通路に小さな灯りだけを浮かべ、目を皿のようにしてページ
に走らせた。

アギズス森林とは、ジタンを拾い、洞窟があつたあの森のことだ。
その隣のアギズス平野と呼ばれる広大な土地に、アルジアが建国さ
れたのは五百年前。

……五百年前？

国記を膝に置き、人狼族の歴史を手に取る。
さらに遡ること百年、六百年前に、アギズスの人狼族ではシンギ・
メロウを新しい族長に立てている。

たつた百年で、いなくなるつてどうこう」とへ
移住するにしても、あの森には「れといった問題も見当たらぬ気がする。

また国記を手に取り、近い年代のページを開いた。

“アルジア建国時、族長シンギ・メロウ率いるアギズスの人狼族は、平野のみならずアギズス森林が荒らされることを懸念し、アルジアに宣戦布告。”

“三十年続いた戦火は、アルジア国將軍ジェイズ・カーネストが連れてきた『白き魔女』によつて、終戦を迎えた”！？」

やつぱりか！

歴史とは事実であつても、眞実とは限らない。
強者が作り、記し、遺していくのが歴史だ。

少しばかり目を離した隙に、あの悪女はまた、やりたい放題してた
ということか。

むかむかとした感情は、深深く、あたしの顔に皺を刻んだ。

あいつめ、いくつになつたら更正するんだ。

せめて何をやるにしても、もう少しおとなしく出来ないもんか。

あの『伝説』と呼ばれる裏魔術師だつて、一応は、裏世界で行動し

てゐるところの「」。

立つてゐるけれど。

「立つのすきだもんないなあ……」

ほつ、と漏れた溜め息は、言葉と共に、ふいに拾われた。

「誰が？」
「……ん？」

背後から射した影は、薄暗い中でより濃くあたしを包んでいた。

「姉が」とまちうらん言えず、どちら様かと振り向いて、しばし記憶の糸を辿る。

「……」「……」

きらきらと僅かな光さえ纏つては飛び散らせる見事な金髪は、無造作ながらも洗練されたショートヘアで。

影になつていても透き通るほど見事な碧い瞳は、人好きしそうな光を宿している。

二十代前半といったところの、すこぶる見目麗しい青年がそこにいた。

「……」

「……誰だつけ？」

「ああ、やっぱわかんないか」

あはは、と笑つたその顔に、ふと、旧友が重なる。

「……ターニャの一？」

「久しぶり、ウインズ」

それは見事に母親似の笑顔で、彼は、ハスキーになつた声でそう言った。

ジタンは不機嫌だった。

初めて見るそれは、何というか、とにかくわかりやすいほどにいた。

原因是彼　　ターニャの息子、イリッシュ・イザベラだと思いつたぶん。

久しぶりに再会したイリッシュは、それは大きくなつていた。

最後に見たのは確か、十歳くらいの時だつたか。

小さくてふわふわで、そりやあもう、昔つから綺麗な子だったけれど。

図書館の奥の個人自習室では、現在、抱きつき虫と化したジタンがあたしの右腕をホールドし、向かいに座る笑顔のイリッシュュに、何故か威嚇を開始している。

何なんだ。

「はじめまして。俺はイリッシュュ・イザベラ。ターニャの鳴子だよ」「……」

笑顔なイリッシュュを見事にスルー。

「ほら、挨拶は？」
「……しなきや、ダメ？」

しない理由がわからん。

あたしの顔を見た途端、ぴんと立つていた耳がへたりと伏せる。懇願するような瞳はお得意のつるつる攻撃で、ぱしづとあたしに撃ち込んできていた。

「だめだ、あたしが負けそう！
何がだ！」

異常に警戒を見せるジタンに首を捻る。
どうしたというのか。

思わず漏れた溜め息に、びくーっと、ジタンの肩が揺れた。

ふるふると震える手が、皺になるほど、そのままひらりとあたしの袖を掴む。

「わっしきからどうじった

「俺のこと嫌いになつたー!?」

……何で?

真っ直ぐな瞳は本気だ。

会話は成り立っていないが……推測するに、わっしきの溜め息に反感したと思われる。

ああ、溜め息にも気を遣うべきか。

いや。

もしかしたら、ジタンはこわいのかもしれない。

誰かに厭われること、一人になることが。

そう考えたなら、出会いにすぐのあたしと契約をしたこと、何となくわかるよついに思えた。

自分にとつての絶対的存在を手に入れておきたかったのだ。

それがどう、お姫様と繋がるのかはわからないけれど。

「嫌いになんてなんないから。ほり、挨拶は?」

ぎゅう、と寄つた眉間の皺が、どれだけ嫌かを物語つてゐるが。

誰かに厭われることを嫌うなら、この行動はないか？
飯屋で働く時だって、あつさり否定を口にした。

あたしには嫌われたくないだけ、とか？

「困つたな」

あんまり困つてなさそなイリッシュはそう言つて笑い、ジタンの胸の内は計り知れないま。

取り敢えず、ジタンとイリッシュは仲良くなれなさそうだった。

「……ジタン・トーチ」

あれから三十分後。

宥めに宥めて、よつやく自己紹介は済んだ。

しばらくはターニャの飯屋に泊まるのだから、上手くやつてもらわないと困る。

案の定、イリッシュは実家兼飯屋に帰るのだと云つた。

「イリッシュュはどれくらいこいつを出したの？」

ジタンがやる気をなくしたので図書館を出た帰り道。警戒網を張るジタンを右腕に引っつけ、左側のイリッシュュに問い合わせる。

「三年くらいかな。魔術師の修行に行つてたんだ」

「魔術師の！」

やはりター二ヤの息子、魔力があつたのか。
しかし……。

「ワインズならわかると思つけど、俺の魔力は微弱でね。ほとんど父さん譲りだよ」

そう、イリッシュュから感じられるのは、僅かな魔力の氣配のみ。普通の人間より長寿だろうが、あたし達ほどではなさそうだった。

それを本人がよしとするか否か。

決めるのはイリッシュュのみだ。

「だから、どっちかつて言つと剣の修行かな

背負つた剣に視線を投げて、イリッシュは柔らかく笑つた。

「そう」

魔術師を志すほどだ。

やつぱり悔しい思いもしたことだらう。

一警ぐれた剣は、見るからに何らかの力が宿るものであつた。

イリッシュの魔力

赤い日が低く落ちようと、ターニャの飯屋に着いた。

ジタンの警戒ぶりに、ターニャまで巻き込まれると不安が胸を過ぎる。

この子の言動は予測不能なのだ。

「ターニャ、戻ったよ」

カラーンカラーン、と錆ついたベルを鳴らし、あたしとジタンは中へ入る。

何故かイリッシュは、立ち止まつたままだった。

「イリ」

カラーンカラーン。

あたしの言葉を遮り、今度は背後からお盆の落ちる音。イリッシュに向いた体を戻したら、驚愕に田を見開いたターニャがいた。

「ターニャ？」

事態を飲み込めていないジタンは、疑問符を飛ばして首を傾げる。あたしだってそうだ。

久しぶりの帰宅に驚いたとしても、一人とも、何かがおかしい。

「イリッショ、あんた……魔力をビリしたのー…？」

それきり立ち尽くすターニャとイリッショに挟まれたあたしは、何が何だか、わからないままに動けなかつた。

「ワインズ、『』飯食べよつ

にっこり笑つたジタンだけは、違つたらしきれど。

お前、空氣読め。

『飯』、飯とうるさいジタンを厨房に連れていく、卵卵とうるさいので、親子丢の作り方を教えつつ、カウンター越しに二人を見ていた。

黙つていたイリッショがようやく重い口を開く。

「…………めさん、ぬわさん」

伏せたその目がターニャを見るこことはない。

ターニャもまた、下を向いて拳を握り締めていた。

ちなみに、隣のジタンはわあわあとうるさくしている。

溶き卵をフライパンに入れれば跳ねた油に飛び退いて悲鳴をあげ、鶏肉を炒めればまた右に同じ。

米が炊ければいい匂いがすると飛び跳ねて喜び……少しばかり静かに出来ないのか。

そんな中でも向こうの二人の会話や様子が手に取るようにわかるのは、あたしの能力によるところが大きい。
この能力は魔力であつてそれだけでなく、別物であるが故に、魔力を消費することなく使えるのが魅力だ。

「……何があつたの？あなたの魔力は……」

イリッシュの魔力？

つい意識を取られて、フライパンにする蓋が止まった。
ターニャは一度唇を引き、一呼吸置いて、自らを落ち着かせようとしているらしい。

そして、より謎の深まる一言を口にした。

「ど」「へい」との？」

「魔力つて移動するの？」

「あんたも聞き耳立ててたわけね」

ジタンと一緒に、首を捻った。

顔を見合せまた首を捻つてから一人に視線を移す。

「来てくれない？ビうせまた聞いてたんでしょ？」

ターニャとぱつちり目が合つた。

仰る通りで。

食つかはわからないが、出来上がった親子丢を四人分よそつてテーブルに着く。
アイスコーヒーだけは作れるようになつたジタンが、それもまた、四人分テーブルに運んだ。

「いただきまーす！」

重苦しい空氣を打ち破り、ジタンの清々しいばかりの明るい声が響く。

ターニャは少しだけ笑つて、「いただきます」と手を合わせた。

「食べながら話しましょ。イリッシュも食べなさい」

「くふ、と素直に頷いた青年は、紛れもなく、ターニャの息子の顔をしていた。

姉と弟にも見える一人は、確かに親子なのだ。

「で、魔力がどうしたって？あたしを呼んだ意味は？」

「氣を遣つて進めたいところだが、ジタンがいる限り、そもそもいかない。

この子は空氣を読まない天才なのだから。
だったら、早いところ核心を突いてしまった方がいいと思った。

箸が止まり、イリッシュはまた皿を伏せた。

その視線は自らの背もたれへと滑り、掛けてある剣で止まる。

「本当は……本当は、魔力も母親譲りだつたんだ。ここを出る三年前までは」

つまり、三年の間に何か魔力を失うような出来事があつた。

剣を取つたイリッシュは、それがあたしに預けた。

「見て欲しい」

「これに何かがあるってことか。

サイズからすれば至って普通だった。

大きくもなく、小さくもなく。

両刃の剣だらうことは、鞘を見れば見当がついた。持ち手の革はだいぶ擦り切れ、愛用していたことがよくわかる。

「これ、もともとはこいつが持つてたやつじゃないよ。いろんな匂いがするもん」

素早く匂いを嗅ぎ分けたジタンが、親子丼からは顔も離さずそう言った。

流石は人狼と言つたところか。

さつきの会話も、その耳なら難なく聞き取れるはずだ。

イリッシュコは嫌いでも、あたしが関わるなら協力は惜しまないらしい。

「後ね、それ、こいつの魔力の匂いもするよ」

突き放した声色からは、気に食わないけどね、と聞こえてくる気がしたけれど。

イリッ・シユの魔力の匂いがする、か。

あたしじゃわからなかつたことだ。

やつぱり、磨けばジタンは、かなり使える子になるだらう。

するりと鞘を抜けば、見事な銀色が姿を現す。

そしてあたしは、息を飲んだ。

「……魔剣！」

久しぶりに目にした大物に、ターニャは、身を震わせていた。

魔剣の登場とは、はてさて、どうじつけか。

なるほどね。

よくよく見たなら、鞘には魔力を抑える印が施されている。

剣身を抜いた途端に放たれた禍々しい気に、思わず顔をしかめた。

俯いたままのイリッ・シユの親子丼に手をつけたジタンは、まるで氣にしてない顔だ。

「あんた、匂わないの？」

魔力でさえ嗅ぎ分ける鼻を持つなり、この氣の匂いはそれこそ、顔をしかめる程度では済まないはずだけれど。

「もつとひどい匂いを知ってる」

「もつとひどい？」

「思い出せないけど、腐った林檎みたいなやつ

ジタンが不機嫌な顔をするくらいの匂い……興味はあるけれど、嗅ぎたくない。

それはそれとして、この魔剣は

「『ダーインスレイヴ』だよね。別名『鮮血剣』だっけ？ ウィンズ、合っている？」

まさしくその通り。

「今日、図書館で見た本にあつたよ！俺、覚えてるー！」

にこにこと尻尾を振るジタンに、呆気に取られた。

様々なものを共有するとはいえ、この記憶力はやはり凄まじい。

『ダーインスレイヴ』 その名は『ダーインの遺産』を意味し、

別名『鮮血剣』とも呼ばれる貴重な魔剣。

闇の妖精ドヴエルグ族であるダーインが作ったとされ、一旦抜いてしまえば、鞘に戻るか破壊されるまで生き血を求める。

これが、『鮮血剣』とも呼ばれる由縁だ。

「そもそも魔力を魔力で抑えてるわけね」

イリッシュュは、小さくもほつきりと頷いて見せた。

世に伝説数あれど、永きに渡り様々なものを田にしてきたあたしは、何が伝説で何が違うかをよく知っている。

今では伝説と呼ばれる『ダーインスレイヴ』の所業の数々は、伝説でなく、全てが事実だ。

それを何故、イリッシュュが持っているのか。
また、何故、イリッシュュの持つほぼ全ての魔力で封印されているのか。

問題はここだった。

「語ると長いけどね」

諦めたように笑うイリッシュュを、ジタンを撫でながら、頷いて促した。

「三年前、『氷の魔女』を頼りに、北に魔術の修行に出たんだ」

何か、聞いたことのある二つの名だな。

面倒なところを頼りにしたもんだと、呆れてターニャを見る。

大方、彼女の話をしたのはターニャ辺りか。

「本当はウインズか『宵闇の兎』^{よにやみ}に弟子入りしたかったんだけど…：二人とも居場所がわからなかつたし、『宵闇の兎』が弟子を取るつて話は、聞いたことがなかつたからね」

まあ、『氷の魔女』なら、弟子入りくらいはさせてくれるだろ？と踏んだわけだ。

居場所の特定も容易かつただろう。

あいつは基本的に、北の地を離れない。

「弟子入りして一年が過ぎた頃かな……師匠にある仕事が来たんだ」

「仕事ねえ」

「それだよ」

訝しむあたしの手元を指して、イリッシュは言葉を切った。

イリッシュが言つには、『ダーインスレイヴ』を持ってきたのは北の地を治めるイシュバジル国總統だったらしい。

「『伝説』と名高い裏魔術師ラジア・ゼルダのライバルと言われる

君に頼みたいつて 師匠はそれに弱いから。もとより、總統閣下
直々じやあ、断るに断れないけど

イシュバジル国は王政国家でなく軍事国家。
總統は国王と同等であり、断らうつものなら、流石のあいつでも追放
されるだろ？

あいつはあの土地を気に入っているのだから、仕方ない話だ。

「狙われているから破壊して欲しいって言つてたよ。でも」

「『氷の魔女』じゃ出来なかつた」

「そつ……師匠では、剣の魔力に適わなかつたんだ」

貴重な魔剣を破壊して欲しい、か。

強力な武器防具は、国にとっての重要な財産だ。

軍事国家ならば性能から考えて『ダーインスレイヴ』は貴重に違
ない。

倫理をなくしていなければ、使うことはないだろ？けれど。

「でも、軍事国家だからねえ……」

「師匠も言つてたんだ。人間が人間である以上、欲望は捨てられな
い。軍事国家がこれを破壊するなんておかしいって

あいつも疑つてたわけか。

空気は読めなくとも、世の理はわかるらしい。
永きを生きていれば、それくらいはわかるか。

「狙われてるって言つたけど、誰に？」

「わからない。詳しい話は、師匠しか聞いてないから」

イリッシュが唇を噛む。

滲んだ血の匂いに、ジタンの耳が反応した。

「ねえウインズ、その剣、二人分の魔力が上掛けされてるよ。一人
はこいつのだけど、もう一人は知らない」

でも、と続けたジタンは、嫌そうにイリッシュを指した。

「こいつから、そのもう一人の匂いがする」

と、いうことは。

「その通りだよ。ジタンは鼻が利くなあ……俺の魔力に上掛けして
吸収を抑えたのは、師匠だ」

イリッショはこうなつた過程を語ってくれた。

鞘ごと焼いても、高度なド・ヴェルグ族の防御術が働いて無傷。刺し貫き粉々にしようとしても無傷。

結局、魔法陣を敷き、剣を抜いてどうこうしようとしたところ、抜刀をしたイリッショが剣身で指を切り、血に反応した『ダーインスレイヴ』に魔力を吸収された。

「師匠が処置をしてくれなかつたら、俺は死んでたよ」

力の籠もつた口振りには、ただただ、無力である故の悔しさが滲んでいた。

あたし達は何も言えず、その場には、ひたすらに沈黙だけが流れていた。

ターニャのちらちらとした視線を感じる。

言わんとすることはわかる、同席させた意味もわかる。

ターニャは飯屋の女主人。

従業員がいる限り、店を閉めるわけにはいかない。

しかし、久しぶりに帰郷した愛息は、とんでもないことになっていた。

魔剣『ダーインスレイヴ』の土産つきで。

「あたしがやるしかないってか」

「頼める?」

「そのつもりだったなんですよ」

お手上げ状態で視線を投げれば、不安が和らいだのか、ターニャはよつやく笑顔を見せた。

千の花とまで謳われた笑顔を見れただけで、引き受けることは充分だ。

「母親似でよかつたね」

「父さんだつてハンサムだつたよ」

「悪かなかつたけどね」

イリッシュもほつとしたのか、安堵が浮かんでいる。

ジタンはびつやら熙いらしい。

ふみふみ言いながら、落ちてくる瞼と必死に闘っていた。

取り敢えず今夜はお開きだ。

「後片付けはやっておくわ」

「ありがと」

ターニャの申し出をありがたく受け取り、覚束ないジタンを歩かせながら、あたしは脳味噌をフル稼働させていた。

ターニャの反応からして、イリッシュの顔は本人そのもの。

変装もしている風でなかつたし、本人からも、そういう話は出なかつた。

追われている様子もない　追っ手の気配もない。

しかし、破壊を命じられた剣は、確かに彼が持つていて。

鞘には術が施行されていた。

もともとの封印と、新たに施行されていたのは、イリッシュ・シユが師匠と呼ぶあいつのもの。

鞘に納まつた状態で、あれを『ダーインスレイヴ』と見破ることとは出来なかつた。

限界を迎えたジタンをベッドに転がして、窓辺に腰掛け、一息つく。くわえた煙草の白煙を追いながら、それらのピースをぱみぱみひと組み立てていく。

剣身には、古代妖精語がびっしりと彫り込まれていた。

例えば。

破壊が出来ないとして、それを彫りえることが出来るとしたら？ ドヴェルグ族は、その昔、イシュバジル国によつて殲滅されたと聞くが、万が一、生き残りがいたとしたら？

破壊の可能性は、なきにしもあらず。

イリッシュの様子からして、彼はあいつに命じられて逃亡したと考えられる。

『ダーインスレイヴ』の気配を消し、彼に持たせたことからも、そういうとしか考えられないけれど。

魔術の修行が三年といつのは、どう考へても短い。でも、總統から依頼を受けてイリッシュショウがあなつてから、少なくとも一年、彼はあいつの元にいた。

「わっかんない」

修行してたつてことか？

「ワインズ、まだ寝ないの？」

そもそもと、肩に上掛けを引っ掛けたまま、臉を擦るジタンが起きてきた。

「ああ、『めん。起』しちやつたか」

「つづん、大丈夫。ワインズ起きてるなら、俺も起きる」

あたしの足元にぺたりと座つて、膝に頭を預けるジタンをゆっくりと撫でた。

本当なら年頃のジタンとは別室が好ましいけれど、それを聞いたジタンが暴れて嫌がつたので、それからずつと同室だ。

無理矢理ベッドに潜り込んできたこともあつたが、ジタンは一切、あたしの嫌がることはしない。

べたべたしてくるけれど、時と場所もわきまえないけれど、ついでに空氣だつて読まないけれど。

どいまでも、ジタンはあたしに真撃だった。

だからあたしは、ジタンに応えたい。
その氣持ちに、ひたむきさに。

少なくとも、ジタンが在るべき場所に還れるまでは。

「今日はいろいろ大活躍だったね」

これは本音だった。

誉めて育てるやうじやない。

ジタンはそれ以上の働きを見せたのだから。

氣をよくしたのか、ジタンはぽろぽろと言葉を紡ぐ。

「あの剣ね、あいつの魔力を取り込んで同化しつつあるよ

「同化？」

「うん。あいつの魔力が剣に溶け込んでる。鞘に納まつた状態なら平氣だらうけど、一度でも抜いたなら、普通は剣の魔力に拒否反応起こして死んじやうと思つよ」

大事まで、ぽろぽろと零した。

「上機嫌な口は止まらない。

「ウインズは大丈夫だよ。風が護つてくれる。魔力に反応して、薄い膜を作つてたよ。あれ、無意識なの？」

……気づかなかつた。

時にその特異性により疎まれ、仕舞には実姉からとんでもない仕打ちを受ける原因ともなつた能力だが、なかなかどうして、無意識に大活躍だ。

そうか。

ジタンの魔力增幅器に手をかざして、光が灯るのを見つめた。

「何？」

「おまじない」

「あはは、変なの」

おまじないなんて、魔術を知る身では、ばかばかしいけれど。わかっているけれど、どうか。

燃え尽きた煙草を灰皿に押しつけて、白煙の残像を田で追つた。

現在、風を斬り、あらぬスピードでジラード荒野を駆け抜けながら、素晴らしい毛並みにひたすら埋もれている。

つまり、ジタンの背中に乗っているのだ。

面倒な盜賊にだつて、このスピードなら鉢合わせる暇もない。何日も掛かる旅路も、このスピードなら一日あれば充分だ。ジタンがやる気満々なので、休憩はいらないようだし。

何て素晴らしい子か！

後でたくさん撫でてあげよう。

ちなみに、イリッシュの件を放り出したわけではない。それについて、イリッシュ本人より先に、調査に向かっているのだ。行き先はアルジア国より西、ラグト国のあるワーカー街。

「楽しみだなー」

他国に行つたことがないのか覚えていないだけか、ジタンの声は弾んでいる。

理由は何であれ、やる気があるのはいいことだ。

戻つてからを思つと不安が過るが……いや、今考えるのをやめておこう。

「見えたよ、ウインズ！」

視線の先には、これまた久しぶりな土地が見えてくる。

何十年ぶりだろうか。

あいつは元気だらうか。

ターニャに会いに行つた時のように、何だか嬉しくなった。
何百年生きていようと、会いたい人がいる土地がまだあることは、
嬉しいものだ。

街の手前でジタンを人型に戻し、あたし自身の足取りも心なし浮か
れている気がした。

ここにいる人物もまた、旧友の一人であるからに違いない。

「誰に会つの？ また友達？」

アルジア国とは違つた趣きを湛える市場^{バザール}は、土氣色のレンガ造りの
街並みに人を呼び、そろそろ夕刻を過ぎ夜になろうという時刻にも
関わらず、それは活気に溢れていた。

ジラード荒野とメメンテ砂漠に隣接することは、商人達が立ち寄る
ことも多い。

通りには、色とりどりお国柄様々人々が行き交っている。

ジタンはひたすら、目を輝かせていた。

「やつ。凄腕の占い師に会いに来たの」
「占い師一本で読んだ！」

説明が省かれて助かる。

自由気ままなジタンだが、いひこちやんと、どじにいてもあたしの後をついてくる。

素直といふか、従順といふか、とにかく、それだけは安心だ。

後で土産の一つも買つてあげよ!と思つた。

それはやつと。

「迷いそうだな」

何十年程度でも、街並みは変わる。

道を変え、家を変え、人を変え、時には国さえもえていくのが時間だ。

わて、目的地までつる覚えで辿り着けるといふけれど。

どうにかこうにか記憶を手繕り寄せ、辺りを見回しながら路地裏に入つていくあたし達は、下手したら完全に怪しい者だと思った。

壁に張りついては、細い道を覗き込んで確認する。

「よし、誰もいないな」

目的が変わっている気がしないでもない。

怪しい動きで素早く走り込んで、何とか、一軒の寂れた家に外れそうなドアを見つけた。

ぎいい、と鈍い音によつて開かれた空間は、ひたすらの闇だった。ひょいっと覗き込んだジタンが「あ！」と声をあげる。

「あの人！？」

早い。

まだ入つてもないのに。

「夜目が利くのかい

「うん！」

指先に灯りを点して、外れないようにドアを閉める。

そのずいぶん先 様々な道具に囲まれた最奥に、彼女は座つていた。

「騒がしい子でね。久しぶり、ビーチェ」

深くフードをかぶった老女が、優しく笑つたのが見て取れた。

狭い店内を何のその、興味深げにうわうわとジタンが見て回る。お願いだから、何か壊したりしないでくれ。

いち早くビーチェの前まで到着したジタンは、元気よく挨拶をした。

「俺、ジタン・トーチーお婆さんは？」

「ビーチェ・カザリだよ。よろしくね」

「よろしくね！」

差し出されたビーチェの手を握つてぶんぶん振り回すジタンに、慌てて制止を掛ける。

何を勘違いしたのか、今度は近くにあつた椅子をかたかたと運んできた。

座れとうとうとう。

「人狼の子かい、ずいぶんと懷いているじゃないか」

「どうせ知ってるんでしょ」

「まあな」

「知ってるの！？す、一、い！」

ビーチェは大抵のことを知つていてる。

そして、ビーチェは大抵のことが見えるのだ。

「物知りお婆さんなんだよ」

あたしの紹介に、フードの下の口元が苦笑を浮かべた。
あたしが煙草に火を点けると同時に、ビーチェは引き出しから水晶
玉を取り出す。

「早速だけど、よろしく

後は待つだけでいい。

「ジタンに土産の一 つもやるんだ。」この店から、すきなものを持
つていくといい
「いいの？」
「ああ、」

人嫌いのビーチェが、珍しくジタンを氣に入つたらしい。

「長生きな者は皆、どうも辛氣臭いがね。あんたとジタンは、明る
いからすきだよ」

確かにね。

皆、永き時に食われていく。
確実に蝕まれていく。

あたしは違うかといえば、そうではない。
けれどあたしは、それ以上にあの姉に昔から……もつ生まれた時から振り回されているのだ。

沈んでいる暇なく姉は次から次へと悪事に勤しみ、尻拭いに奔走するうち、あつとこう間に時は過ぎていく。
まさに、開き直りと呼ぶべき克服の仕方だ。

「あんたの生き様は見事だよ、ウインズ」
「心でも読んだ？」
「読まなくたってわかるのや」

いいのか悪いのか。

何はどうもあれ、ビーチェからジタンに贈り物がされる。
この店には珍妙なものから貴重、希少なものまであるわけで、これは嬉しい話だ。

「何がいいかな」
「ビーチェ、何かくれるの？」
「うじいよ」

闇に咲き誇るジタンの笑顔に、つられたみづこ、あたし達は笑った。

棚にひしめき合ひ品々眺めながら、どれが似合つかを考えつつジタンに合わせてみる。

ジタンはジタンで、あれやこれやと気に入つたものを手に取つては歓声をあげていた。

「そんなにはやれんなあ」

ビーチHの苦笑いに振り向けば。

「ジタンー。」

どこの成金かと言わんばかりにじゅうじゅうと着飾つた彼が、得意満面でそこにいた。

青年だとこつこのことの無邪氣さはございんだ。

「こつぱこすきなのがつたよ

「もつ……ん?」

ジタンがつけたのか、たまたま引っ掛けたのか。

腰についた闇より深い漆黒の石が、何故か、煌めいたよつて見えた。

手に取つて、灯りのもと田を凝らす。

「こんなものまであんの」

「流石の品揃えだろ？」「

ビーチェの言葉に唸るしかなかつた。

『黒星石』
ブラックスター
黒炎を宿すその石は、全てを焼き尽くすと言われる魔石。

「黒竜が死んだ後、その魂を宿した石だ。竜は気高き生き物、持ち主を選んだようだね」

決まりだ。

氣高き魂は、無垢な魂を選んだ。

それに間違いはないと、あたしは断言出来る。

サイズからして魔力增幅器と同じくらいだから、空いている右手にグローブとして嵌めるといいかかもしれない。

「本題に入りうか、ウインズ」

他の品物を棚に戻して、ビーチェの言葉に頷く。

これから道標を照らしてくれる時間が来た。
その水晶には、何が映ったのか。

フィルターまで燃え尽きた煙草を灰皿に捻じつけ、小さな椅子に腰掛ける。

興味津々なジタンは、水晶を覗き込んでいた。

「まずははさうさね、黒星石をグローブに取りつける腕のいい職人は、
市場の端にいる」

「そこまで見てくれたの」

相当お気に召したらしい。

弧を描く口元は、そうだと言わんばかりだ。

「広場へ抜ける手前だよ。煤けた茶色いテントを張つてゐる男だ」

「男なんだ」

水晶に映し出された無精髭の男に、ジタンの靈行きが怪しい。
皺くぢやの手が、優しく耳を撫でつけた。

「お姫様のためだ、我慢おし」

「そんなことまで知ってるわけね。

ちら、とあたしを見やつてから、ジタンは小さく頷いた。
嫌々なのが滲み出ているが、気にしないことにする。

「さてお姫様、」

「それやめてよ」

「白髪の君がいいかい」

「『はくはつ』ね」

気にしているわけじゃない。

ただ、『しらが』は流石に、抵抗がある。

くく、とくぐもった笑い声に、大きく肩を落とした。

「で？」

「ああ。アルジアに戻りターニャの息子を連れて、北の地イシュバ
ジルへお行き」

危険だとわかっている。

けれどあたしも、それしかないとと思っていた。

取り敢えず、『氷の魔女』を頼りにするしかないか。

水晶の画像が変わる。

目を細め、砂嵐のように揺れるそれに見入った。

「ドヴェルグ族の生き残りがいるよ」

その言葉に、ジタンと田を合わせた。

何はともあれ行き先は決まった。

後は、あたし達次第といったところか。

ふつと消えた映像を不思議そうに見つめるジタンが、ヒーリングヒューマー
チエに笑顔を向けた。

「ビーチェは何でも見えるの？」

「何でもじやない。が、大抵は見えるわ」

ビーチェは大抵を見るが、全てを見通す千里眼を持つわけではない。
いくつもある中の道標の一つを示すだけだ。

何故か。

簡単なこと、魔術師のほとんどはあたしを含め、運命を信じていな
い。

運命とは何か。

過去が決まっているならば、未来も決まっているということだ。
定められたものからは逃れられないということ。

それすなわち、如何に足搔こうと、未来は変えられないということ
に他ならない。

そんなもの、信じて堪るか。

あたし達は生きている。

森も動物も泉も木も花も、全てが生きている。

あたし達には意志がある。

自ら選び、思考し行動している。

生まれたなら死ぬ。

それは変えられない自然の理だが、見えない先は自分で選ぶ。
自分で選ぶからこそ、全てには価値がある。

だからこそ、生には意味があり価値があるのだ。

少なくとも、あたしはそう考えている。

ビーチュもまた、似たようなものだろう。

だからあたしはビーチュに結果を聞くことはない。
ビーチュもまた、見えているかもしれないいくつかのそれを口にすることはない。

ジタンもいつか、それを考える日が来るだろうか。
出来るなら、そんな小難しいことを考える必要がなければいいと、
密かに思った。

と、そんな胸中知る由もなく、ジタンは完全に前のめりだ。

「俺とウインズがずっと一緒にいられるか見て！」

……ずっと？

待て、待て待てずっとって何？

ずっとって……ずっと、ジタンはあたしに面倒を見てもいいつもつ
つてこと…？

いや。

いやいやいや、待つてジタン。

自活しようよ、自立しようよ、取り敢えずあんた大人でしょうが！

と言つまでもなく。

初めてじゃないかってくらいに、ビーチェは大声で笑つた。
少なくとも、あたしが知る限りでは初めてだ。

「心配いらないね」

何が…？

とはやつぱり言つまでもなく。

「ジタンにとってワインズはお姫様だ」
「そう、ワインズはお姫様！」

主様の間違いだ。

「そして、ジタンの世界そのものもあるね」

「やつ、俺の世界ー！」

意味がわからん。

口を挟むまでもなく進んでいく会話に、ただ、呆気に取られる。あたしの意志はお構いなしか。

フードの下から覗いた瞳は、今度は、あたしを見つめていた。

「あんたにとつて、ジタンは星だよ」

「星？」

「まだわからんどうつせ」

謎の言葉の意味を教える気はないじへ、その瞳はただ、優しく弧を描いていた。

星、ねえ……。

「ウインズの星があ……俺、すういねーー！」

「ああ、すごいかもね……」

絶対に意味わかつてない。

はしゃぐジタンから逃れられないとばかりの予言に、元氣に諦め半分。

そして何故か、気持ちの隅には暖かさも感じていた。

ヴァーノ

ビーチHの店を出た頃には、すっかり日が落ちていた。

もどが暗い店内だったから、そんなに違和感はない。

ジタンの手にある黒星石は、闇にあってもときどききらりと煌めく。

「初めて見たけど、不思議な石だねえ」

「グローブにくつつけてくれるんでしょ？」

「右手が空いてるからね」

『宵闇の兎』と呼ばれる武器商人なら、果たしていくらの値をつけ
るだろうか。

彼女はまあ、たくさんのお宝を持つているから、主人を選ぶような
気難しい石は欲しがらないかもしれないけれど。

何にしろこれで、ジタンは炎を扱える。

風と炎か。

「上手く連携を取つて闘えば、あたしとあんたは、相性いいかもね」

風は炎を煽り、相乗効果が生まれる。

もちろんあたしの風は、炎を遮り鎮火するだけの力もある。

何にも染まらない漆黒は、同じ色を持つジタンによく似合っていた。

「すぐに市場に行く。」
「やつしたいけど」

果たして市場が、ビーチョが言つた男が、この時間までやつている
かどうか。

「行くだけ行ってみるか」

宿を取るまでの金も時間もない。
金は全て、ターニャに預けてきていた。

市場までやつ遠くない道を今度は、堂々と歩きだした。

夜道は歩こいやいません。

遠こ昔に、聞いた気がするけれど。

「久しぶりに遭った」
「そうかよ、俺もだぜ」

夜盗に出てゐていた。

今日はジタンに乗つてここまできたわけで、出来の悪いなかつた。
前後を取られてくるとは、つけ狙っていたか。

リーダーらしきガタイのいい兄ちゃん……というには少々年増な男が、汚らしい舌で唇を舐めている。

が、汚らしげ話で唇を舐めてくる。
月明かりできりつとナイフや剣をねじりこへ見せつけ、恐怖心を
煽りたいらしい。

が

「誰？」

隣の無垢な漆黒の瞳は、緊張感の欠片もなかつた。

「悪い人」

伸のすか。

と思つたのも束の間。

「…あれや」

卷之二

ପ୍ରକାଶକ -

隣で風の唸りを感じたと同時に、目の前の三人が瞬殺された。

「ひ、ひひ……」

生きてはいるらしい。

速い。

ひゅう、と風を纏い振り向いたジタンの瞳には、金色の一筋が獸の
ように浮かびあがっていた。

一瞬にして三人だ。

しかも、得物もなしに体術のみで。

風が、纏わりついている。

ごく自然にジタンを取り巻き、ジタンを受け入れ加勢をしているよ
うにも見えた。

この子もまた、風に愛された者か。

能力自体はなくとも稀に、そういうた者は確かにいる。

流石は獣人、人狼族の純血種。

自然は彼らと共にあるのだ。

「てめえらああああ！」

「ウインズ！」

左手を振り払う。
それだけだ。

ひゅつ。

風が鳴く。

路地裏のより後退した遙か先で、背後にいた四人はくたりと伸びた。

「ウインズ……すうい」

「ジタンもね」

相性は、間違いくよさそうだ。

夜盗を縛り上げ、突き出すつもりで引っ立てる。所々折れていようだが、自業自得なので仕方ない。氣絶した一人をジタンが抱き上げたとき、男の腰巻きから、ぼたぼたつと何かが落ちた。

「これ……宝石?」

あたし達より前に、襲われた不運な人がいたらしい。

「あ、もしーそれは自分のなんだ!」

市場の方向から掛けられた声に振り向けば、息を切らしながら駆け

てくる男が見えた。
どこか見覚えが……。

「あれ、水晶で見た職人じゃない？」

ジタンの言葉に、ああ、と納得する。

無精髭を蓄えた男は精悍な男前で、外見は三十代半ばといったところだろうか。

夜盗に巻かれたらしく、肩の上下はかなり激しい。

「助かった助かった」と、大事そうに宝石袋を受け取った。

「よかつたね、おじさん」

水晶を見たときの嫌々な雰囲気はどうやら。

ジタンは笑顔でそう言つた。

「おじさんて」と突っ込みそうになつたのを、取り敢えずぐつと堪える。

見た目的には間違つていない。

「いやあ、本当に助かったよ。商品搔つ払われて追い掛けたんだが、
どうにも追いつけなくてなあ」

がははは、と豪快に笑つた彼は、今度ははたと、あたしを見た。

「『風の魔女』とお見受けするが?」

「知つてゐるの?」

「ひ、暗くちや何だ。お礼も兼ねて、うちに来てはどうだ

願つたり叶つたり。

「つこでに泊まつていけよ」と言われ、今夜の宿は決まった。

「」の見えて俺の本職は武器職人でね

煎れたてのお茶を出しながらそう言つた彼は、エイツ・マッケンローと名乗つた。

「あんたらほびじやあないが、少しばかり魔力もあつてな。婆さんが魔術師だつたつてわけだ」

彼が言つては、その婆さんとやらには放浪癖があるらしく、しばらく見ていないとのことだった。
まあ、魔術師なら、どこかで元気にやつてているかもしれない。

「魔力があるなら、あいつらやつちやえばよかつたのに」
「そもそもいかねえんだよ」

ジタンの問い掛けに、エイツはまた豪快に笑った。

「俺の魔力はもっぱら職人用らしくてな。それなりに体術は仕込まれたが、まあ、普通より強えつてくらいだ。足の速さも並の人間と変わらねえ。陣も術も使えねえんだよ」

「職人用つて？」

ジタンは興味津々だ。

質問は任せて、お茶を啜ることに専念することにした。

「親父が職人でな。俺の魔力は、武器防具に込めることで發揮されるってえわけだ」

部屋中ずらりと並べられた武器防具　もつきから一味違つと思つていたが、原因はそれか。確かに、腕のいい職人だ。

それにして、陣を張れないとなると。

「ここの店の陣は誰が？お婆様？」

話からすれば、エイツではないはずだ。

しかし、確かにここには、強力な陣が張られている。

ああ、とエイツは立ち上がり、四方に灯された灯りの一つを指した。

「陣光石じんこうせきを四方に置いてんだ。お得意様お得意様がくれてね」

すん、と鼻を鳴らしたジタンは、曖昧な顔で首を傾げている。
匂いがわからないらしい。

つまり、魔力の気配を消すことが出来る者が作った、高度な陣光石
というわけだ。

それを見ていたエイツは、何故か、得意気に胸を張った。
あんたが作ったわけじゃなかろうに。

「ふつふつふつ……わからんだろう。人狼のあんちゃんだってわか
らんだろうよ」

「ジタンだよ」

「そうかジタンか」

「ジタン・トーチ」

「そうかジタン・トーチか」

放つておいてもいいかな。

氣の合うらしい二人は、ふつふつふつと笑い合っている。
ジタンに至っては、何故そういうのかがわからない。

「これを作ったのはな、あの『宵闇の鬼』だ！」
「ああ、やつぱり」

し
ん。

「もつと驚けよー。」

そう言われても。

「だつて武器職人なんでしょ？ 武器商人のあいつと何らかの交流があつても、おかしくないじゃない」

それでいて一流の魔術師といつたら、それしかあたしには思いつかない。

相変わらず、古今東西交流の幅が広いことだ。

腹が減つたと騒ぎだしたジタンに、ハイツが台所へ立つ。

「借りてもいいなら、ジタンを作りせんよ」
「いいのか？ 悪いな」
「その代わり、お願ひがあるの」

ポケットから黒星石を取り出して、エイツにかざして見せた。

「これだけあつたら、カツの卵とじ丼と卵スープが作れるねー」

「まあ……そうね」

「わきうわと腕まくつをするジタンを台所に残して、作業場へと顔を出した。

「どう?」

「ずいぶんといい品だ。どうで手に入れた?」

すっかりやる気満々なエイツは、灯りにかざして黒星石を眺めている。

「ビーチョつていう占い師の店でね」

「あの婆さんとこか。よく買えたな」

「ジタンにくれたの」

「珍しいこともあるもんだ」

魔力ある者の間でビーチョは有名だ。

そしてまた、彼女の人嫌いも有名な話だった。

「お前さん達には助けてもらつたしな。三時間もありやあ、立派な魔具に仕立ててやるぜ」

「頼むわ」

タダと思つていいだろうか。

いざとなつたら、足りない分は後日支払いに来ないとならないかも……。

作業は本職に任せて、台所も大丈夫だろう。
手持ちふさたに煙草をくわえ、壁を覆い尽くす見事な魔具達を見て回る。

伝説の品とまではいかずとも見事な出来映えが、エイツの腕が一流であることを物語ついていた。

「す、」「いわね……そりゃあ、あいつも取引したいはずだ」

魔力を込める、というだけあって、それぞれに魔具と言つて済むらしい魔力性能が付属されている。

エイツの魔力は、内に込めることに特化しているのだらう。

まさに、職人用だと思った。

「破壊のために使うより、ずっとといいね」

例えこれらが、それを目的に作られたとしても。
使い方次第、持ち主次第なのだ。

これは、とある武器商人の言葉だつたけれど。

夕食で一旦休憩に入ったハイツは、もつ少しだからと作業に戻つて
いった。

適当に奥の部屋を使つてくれと言われ、洗い物を済ませてからジタ
ンと共にそこへ向かう。

小綺麗にされたそこには、ダブルベッドがあつた。

ダブルは流石にどうだらう。

今までの一ヶ月、同室だつたとしてもベッドは別だつた。
ジタンはそういういた氣配さえさせないけれど、そつは言えども青年
だ。

……体だけは。

いや、あたしだつて生娘なわけじゃないけれども。

まあ、大丈夫か。

「ウインズ、お風呂は？」

「先に借りてきていいよ」

いつでもまーすーと元気に出ていったジタンを見送つて、ベッドに
身を投げる。

あれ……？

急激に襲ってきた眠気に、視界は少しずつ、遮られていった。

あたし、こんなに疲れてたっけ……？

一面は緑だった。

空は限りなく白に近い青で、緩やかにまた白が流れゆく。
小鳥の轟り、木々の柔らかな葉擦れ、頬を撫で髪を櫻う風は優しく
通り過ぎてまたやつて来る。

さあ、と風が鳴いた。

「はじめまして」

「参ったな……」

突如現れた彼女の言葉と、あたしの言葉が重なる。

光を纏う黄金の長い髪、透けるような真っ白い肌。

空の色をした右目と緑の色をした左目は、空と大地を繋ぐ役割であることを指している。

それがあたしは知っていた。

「ふふ、ずいぶんね。わたしはずっと待っていたといつのこ

ふわり、と彼女が笑う。
あたしも笑うしかない。

あたし如きでは、手に負えないからだ。

「あなたの名前は？」
「知っているでしょう」
「たぶんね、一応よ」

不羈な物言いにも、彼女は柔らかく笑つたままこいつ答えた。

「ヴァーユ」

それは、今は失われつつある古代神の一人の名前。
そして『あたし』が『あたし』である限り、何よりも身近であるはずの神　『風神』の名前だった。

「あなたは何と言つの？」
「ウインズ・ゼロムス」
「『風』の名前を持っているのね」

嬉しそうに彼女が笑えば、それに応えて風が囁ぐ。

「……………神様なんて、上の上なく」わいんだだけぢー

「うはまあ出来ない。」

そう、ここは精神世界だ。

「待つてたって、どういうこと？」

「ああ……あなたのいる今より少し昔の人間がね、わたしの一部を

現世回転 強引に見せてしまふのが

すごいことをした奴がいたもんだ。

あたしの苦い顔に気づいたかどうか。

それはわからないが、彼女は話を進めた。

「せっかくだから、そのままにしてあるのだけれど」

風は自由であり、ありのままを受け入れる存在。すなわちそれは、司る神の氣質そのものと言える。

彼女はまさにそれだ。

ほつ、と頬に手を当て嘆息する様は、どこか演技じみている。面白がっているようにも見えるのは、気のせいだと思いたい。

「なかなか『わたし』を扱える者がいなくて、寂しい思いをしていたの」

「まあ、やうでしょ、うね」

神とはすこぶる我が儘であると、それは遥か昔から語られている。

気難しく、自由奔放。

気に入らなければ容赦なく切り捨て、責めなければへそを曲げて天罰を下す。

善も悪もなく、それはただ神の意志だ。

神々が見目麗しくあるのは、その方が神自身、都合がいいからに他ならない。

と、どこぞの悪女が語っていた覚えが記憶の片隅にあるが、否定は出来ない気がした。

賛同もしたくないが。

「あなた、使ってくださいなー?」

……。

「あたしが?」

「あなたには『わたし』の力があるでしょう、わたしが気に入ったのなもの、きっと『わたし』の一部も扱えるわ」

そもそも、ヴァーノの言ひそれが、どんなものかもわからない。が、断つたら断つたで、未恐ろしい氣もある。

悶々としていたなら、また風が鳴いた。

「その家の主に言えばわかるわ。『ヴァーノ』よ」

田の前は、真っ白になつた。

重い。

気がついて最初に思ったのは、そんなことだった。

「……何故に抱きついて？」

すやすやと寝息を立てるジタンの漆黒に縁取られたそのままもちらん伏せられており、長くも青年らしい手足は、がつちりとわたしをホールドしている。

ふわふわとした髪の毛が、あたしの鼻を掠めた。

あ、柔らかい。
何ていい毛並み……

「ぶえっくしー。」「ウインズ！」

それは素晴らしい寝起きで飛び起きたジタンが、覆いかぶさるよつに、今度は前からあたしをホールドした。

「よかつた！ よかつたああああー！ ウィンズ、全然起きなくてね！ 僕、心配で寝れなかつた！」

「寝てたよ」

「寝れなかつた！」

「そつか」

まあいい。

つむづむの瞳には、どうせ適わないのだ。

「わかつたから離して」

「離さない！」

「何で」

「心配した！」

それは本当らしい。

巻きついた腕は、小さく震えていた。

宥めるように撫でてやれば、落ち着いてきたのか、少しだけ力が和らいでいく。

人狼というより、子犬みたいだ。

「……心配、した」

「そうか」

「本当に心配したんだ」

「うん、ごめんね」

「神様に呼ばれてました」何て、言える雰囲気でなく。

窓からは朝日が射している。

ずいぶんと氣を失っていたわけで、やっぱり、彼としては不安だったのかもしれない。

「置いていかないで」

小さく、耳元で呟かれたそれの真意を知る由はないけれど。

より引つつき虫と化したジタンを引きずるように台所へ行けば、輝かんばかりの笑顔でエイツが迎えてくれた。

「よう、コーヒー飲むか！？」

「元気だね」

「徹夜明けだ！」

ありがたくちょうだいして、煙草をくわえ椅子に座る。エイツもまた煙草をくわえて、あたしの灯した火で先に白煙をあげた。

「渾身の出来だ」

渡されたグローブはジタンに渡したものと同じ焦げ茶色をしていて、中央には黒星石が鎮座している。やはり左のグローブと同じく指先は出るデザインで、薬指の部分には、小さな漆黒の石がついていた。

「これは？」

「ジタンは人狼なんだろ？お似合いだと思つてな。安心しろ、全てサービス、お礼だから受け取ってくれ」

徹夜明けとは思えない晴れ晴れとした笑顔で、エイツはそう言つ。本当にタダでいいらしいから、お人好しもいこうじるだ。

「ありがたいけど、大丈夫なの？」
「あの武器商人と取引してんだ、充分稼がせてもらつてるさ」「確かにね」

嬉しそうにグローブを眺めるジタンにそれを渡せば、すぐに嵌めて見てくれた。

「す、じい、手に馴染む」

「や、ひだりうそ、うだりう」

革だけでも上等な品だ。

後は、黒星石をジタンがどれだけ扱えるか。

それは、あたしが修行してやれば、早い段階でものに出来るだらう。

扱える……ああ。

「『ヴァーゴ』って、わかる?」

すっかり忘れていた重要単語で、ヒイツもまた「ああー」と思いついたように手を打った。

「忘れてた忘れてた!」

じたじたと忙しなく作業場に引っ込んだかと思えば、両手に乗る程度の箱を持って帰つてくる。

ずいぶんと仰々しい鍵を開けたなり、見事な細工の真っ白な短銃が姿を現した。

「前に『宵闇の兎』が来たとき、これをお前さんについて言付かつてたんだ。ほら、あの人銃マニアだろ？どつかで手に入れたらしくてな」

ひどいノーロンだけどね。
とは言わず。

「何か扱えなかつたつて言つてたなあ。まあ『ヴァーゴ』　『風神』の名を冠するくらいの銃だ、人を選んでも不思議じやない」

昨日今日と、よくよく人を選ぶものと縁があるらしい。

「とはいえ、流石は名の知れた武器商人だ。こんな伝説級の魔具、お目に掛かるうつたつて、なかなかそうはいかないぜ」「確かにね……細工も見事だよ」

真っ白な本体は大理石だろうが、風の魔力が働いて驚くほど軽い。持ち手に彫り込まれた女神は、夢で見たヴァーゴとよく似ている。瞳に嵌め込まれたアクアマリンとメノウが、魅惑的にきらめき、縁取りの金色が上品さを醸し出していた。

「何らかの力が働いてるのか、傷一つつかないんだよ

ヴァーノーの一部を封じ込めたくらいだから、最もな話だ。

「きれーー」

「わう言つても、うすれば、ヴァーノも喜ぶだろ?」

ハイツの話によれば、銃にも関わらず、弾はいらないらしい。
込める場所はあるが、扱える者にとって、それは飾りでしかないとい
ふのひと。

「あなたの力が弾になるのぞ、『風の魔女』」

なるほど流石は『風神』の銃だと思つた。

理由と気持ち

エイツに礼を述べ、早々にアルジアへと向かい、ターニャの「飯屋」に到着したのはその日の夕方。

これから北のイシュバジルへ向かうには、イリツ・シユもいるため、もちろん徒步となる。

よつて、旅支度を整えるためにも一泊必要だった。

そして彼は、いつになく不機嫌甚だしかつたのだ。

「ジタン、どうした？」

「……」

「主様を無視すんのか」

「……しない、けど」

一日、ふりのシャンプーの匂いを振り撒いて、がしがしと頭を拭きながら、ぶすけるジタンに問い合わせた。

けど、何だ。

ベッドの上で膝を抱えて、ちら、と向けられた視線はすぐ逸りされる。

言いたいけれど言えない。

そんな雰囲気が滲み出していた。

「何、怒らないから言つてみな」

隣に腰掛けたなら、ぎし、とベッドが鈍く軋む。

びく、と肩が揺れて、「うー」と小さく唸ると、また沈黙を守つてしまつた。

「お腹でも壊した?」

「……違つ」

「疲れちゃつた?」

「……違う」

「どうしたか言つてくれないと、あたしにはわからないよ」

よつやく交わつた漆黒は、ただただ、不安に揺れていた。

「俺、ワインズがすきなんだ」

「……知つてるけど」

何を今更。

あれだけ大々的に愛情表現されれば、いくらあたしが鈍かろうがわかる。

が、返答が気に入らなかつたのか、ぎゅ、と眉根に皺が刻まれた。

「違う、だいすきなの
「うん、知ってるよ」

あたしはこの時、『だい』の部分が伝わらなかつたことが氣に入らなかつたんだろうと。

そう思つていた。

そうだと疑わなかつた。

天地がひっくり返るまでは。

「
...
」

まさに。

まさに今、天地がひっくり返つた。

あまりに驚きすぎて、声も出ない。

ジタンは覆いかぶさつたまま、ひたすらにあたしを見つめていた。
その漆黒の瞳で。

「違う……違うんだ、ウインズ」

ああ、また泣きそうになつて。

あたしはその瞳に弱いんだつて、知つてゐるはずなのに卑怯だ。

その毛並みのいい髪を、耳を、撫でてあげたいのに、体は力が抜けてしまっている。

真っ直ぐな視線に射抜かれて、まるで、ピンに刺さった蝶みたいだ。

「違つ……違わないけど、何か違つ。上手く言えないと……」

必死に絞り出したらしく言葉は、語尾が震えている。
つぐんでは開き、またつぐんでは開き。

自分でも上手く言葉にならないらしい、眉根の皺が深くなっていく
のが見えた。

「俺……俺、記憶も、なくて……言葉もあんまり、知りなくて……
「…………うん

めやく、それだけが口から零れる。

「知り、なくて……でも、
「…………うん

心が痛い。

ひたすらに言葉を探すジタンに、そんなことを感じた。
ひたすらに言葉を探して、ひたすらに伝えるようとするジタン。

「でも、でも……でも、ウインズが、すき、なの……」

息が、止まった。

あたしはばかだ。

あたしは、ジタンの気持ちをわかつていなかつた。
主になつたのは成り行き　本当に？

運命なんて信じてない。

そんなものはこの世にない。

それでも、震えるこの子を抱きしめたいと思つ氣持ちは何だひつ。
親心とは違つようなこの氣持ちは……何だひつ。

嘘じやない。

ジタンの瞳がそつ言つてゐる。

だいすき。

ジタンの瞳がそつ言つてゐる。

だいすき。

だいすき。

傍にいて。

傍にいたい。

離さないで。

離れたくない。

愛して。

記憶がないが故に、何もわからないが故に、信頼する者があたしからないが故に。

だからあたしが『主様』。

だからあたしが……『お姫様』。

散らばつたあたしの白いジタンの手が優しく掬つ。ただただ、慈しむように。その手があたしの唇をなでる。ゆっくりと、震えながら。

「……だいすき、ウインズ」

一瞬、全てはあたしの勘違いかもしぬないと思った。いた。

ジタンはまだ、無垢なのだから。

親しい者があたしだけだから、主があたしから、感情がこちやんになつてゐるのもしれない。

それでも。

「……ん」

降ってきた柔らかな感触を何故か、拒めないあたしがいた。

どうしてなんて、わからない。

触れて、啄んで、恐る恐る侵入してきた温かな舌を絡める。

「ふ、あ……んづ」

自分のではないような甘ったるい声と、それを追いつのように水音が鼓膜を打つ。

大きな手で耳を塞がれて、それらは、体の中で甘やかに響いた。

こんな口づけは初めてだ。

求められ、慈しまれ、存在を確かめられているような口づけ。

要領を得たらしにジタンの舌が、優しく歯裏をなぞる。

思わず反った背筋が、ぞくりと震えた。

その隙間にするりと手を差し入れられ、上手く力が入らない。支えられた体は不安定で、揺れるような感覚に陥った。

「……は、ジ、タン……」「ウインズ……」

離れた唇を細い銀糸が繋ぎ、ジタンの舌がそれを舐め取ったのが視

界の端を擦つた。

一瞬、後悔を滲ませた顔が、あたしの胸元に沈む。

「ごめ、なさ……ごめんなさい……やだ、嫌いにならないで、ならないで……ウインズ……」

小さくため息が漏れた。

あたしこそ、とは言えなかつた。

ならぬよ。

聞こえたかはわからない。
どちらでもよかつた。

その体を抱きしめたなら、腰に回されたその手に、ぎゅう、と力が籠もるのを感じた。

流されたのか。

それはわからない。

流されたのかどうかさえ、あたしにはわからなかつた。
ただ、応えたい。

そう思ったあの瞬間は、きっと真実。

「大切だよ」

少なくとも、出会った時よりはずつとずつ。
ジタンといふ時間は、確かに、過去のそれよりはずつとずつとぞりぬ
いてい。

ジタンの気持ちはやつぱり、あたしからしたら勘違いかもしれない。
あたしの気持ちはまだ、曖昧にしかかたちをなしてはいなけれど。

その両腕に力を込めて、ただ今は、この子を離さなこう。

翌朝、六時。

「……ウインズ？」
「うーん……」

もそもそと寝返りを打つ。
まだ早朝なのに何……誰？

「ウインズ」
「！？」

飛び起きた。

するり、空しく上掛けが滑り落ちる。

「……」

ドアの先には、田を見開いたターニャ。しっかりと田が合つた。

「……胸、まる見え」
「……はい」

飛び起きたせいで上掛けがずれて、ジタンの上半身もまる見えだ。ターニャの視線は、それは素早く全てを確認した。

「一言だけいい？」
「……どうぞ」

『氣まづこ空』が部屋中に漂つて、知らず田が泳ぐ。

「イリッシュのじとが済むまで、避妊はしてよね」
「……はい」

ついでに口づかなかつた。

ようやく上掛けを胸元まで引き上げて、肩を落としたのは三つほど

もない。

不穏な噂

飯屋の前に、あたし達四人はいた。まだ早い朝の空気が、ひやりと頬を撫でていく。ターニャは心配そうにイリッシュの手を取った。

「くれぐれも気をつけて」

「うん」

「『氷の魔女』にも、くれぐれもよろしくって、鷹を飛ばしておいたから」

「あ、ああ……うん、あ、ありがとうございます」

イリッシュの笑顔が引きつった気がしたが。

ダーインスレイヴを背負い直して、イリッシュは力強く言った。

「必ず、元に戻ってくるよ」

『すぐに』とは言わなかつた。ターニャもまた、頷いただけ。

「そろそろ」

「ええ」

声を掛ければ、名残惜しげにイリッシュから離れていくターニャ。その目が潤んでいたけれど、見なかつたことにする。旦那に先立たれ、魔力を持ち生まれたはずの息子からそれが失われたという現実。

不安にならないはずがなかつた。

ターニャの目があたしを映す。

「頼んだわ」

一つ頷きを返し、朝靄あさもやの中を挑むように見上げた。

「イシュバジルって遠いの？」

人型のまま隣を歩くジタンは、昨夜のことを気にしないように決めたらしい。

至つて大人の心掛けだ。

「まあ、近くはないかな」

アルジア国^{アラブ連邦}の北に位置する最北の地イシュバジル国。

その面積は広大で、国内でも地域によって気候の違いが出るほどだ。

ピグス国とを隔てる深雪のイシュタリー山脈を北東に持ち、山脈境界には北に先鋒部隊常駐のイシュタリー北壁、東にニヌルタの森を有する。

覚える氣満々らしいジタンは、あたしの説明に熱心に耳を傾けていた。

ターニャの飯屋があつたのはアギズス森林に隣接するアルジア国南部であつたから、まずはアルジア国そのものを通してしなければならない。

ジタンに乗るわけにもいかないので、結構な長旅だ。

「アルジア自体はそう大きな国じゃないけどね。イシュバジルはアルジアの三倍はあるから、あいつのところに行くまでは、なかなか骨が折れるよ」

「『氷の魔女』のところ？」

「そう」

北の地と言つても、雪に見舞われるのはイシュバジル北東のみだ。
『氷の魔女』はイシュタリー北壁とニヌルタの森の境、ミユートの街にいた。

「ここので一旦区切つたら、イリッシュが残念そこに笑つた。

「これが師匠の知り合いじゃない人の口から語られたなら、師匠も大喜びなんだけどね」

「『伝説』にでもならない限りは無理だね」

一つ名を有する者は多い。

が、実際に少ないといえど、魔力を持つ者自体は世界に三割はいるといわれ、そんな中で、一般的にも語り草になるよつな魔術師はないのだ。

魔術師は永きを生きる故、達観するか絶望するかで両極端だ。

そんなこともあって、子孫を残す者は少なく、長寿にも関わらず総人口数は変わることがない。

「増えないし減らないんだ?」

「今のところはね」

ジタンの問い掛けに肩を竦めた。

空が白む頃を過ぎ、陽の光はだんだんと黄色みを帯びてきていった。

「今日も晴れるね」

見上げたジタンに続き、空を仰ぐ。

あたし達の未来も、これくらいに晴れ晴れとしていたならいいけれど。

後に顔を合わせるだらつ『師匠』を思い浮かべ、どうか穩便に、と

小ちく手を合わせた。

一田、一田、二田と何もなく、旅は順調に見えた。

四田の夕方。

「イシュバジルの總統が変わるらしいよ。」

屋台で唐揚げを買えば、世間話に混じってそんな言葉をおやつさんから聞いた。

「変わる?」

眉をひそめて聞き返せば、同じくそれらしい顔をしておやつさんがあくびを乗り出す。

「ああ、結構出来た人だったらしいじゃねえか。残念だねえ」

軍事国總統でそう言われるとは、それなりに善政を敷いていたのもしれない。

イリッショニ至つては、唇を噛み締めていた。

「おやつさん、よく知ってるね。他に何か面白い話ないの？」

「氣をよくしたおやつさんは、より身を乗り出してあたしに耳打ちした。

「じりやん、噂によるとな……」

たんまりと唐揚げを購入し、宿屋の一室にあたし達はいた。

「暗殺らしい、つてか」

「それが本当なら、国の一大事だ。早く師匠のところに行かないと」「まあねえ……」「まあねえ……」

イシュバジル總統が暗殺された。

噂が本当なら、それは近隣国家にとつても一大事となる。

イシュバジルは軍事国であり、近隣最強国。

次の總統が出来た者とは限らないし、暗殺となれば間違いなく火の粉は飛んでくるものだ。

正直言つて、それは大した問題じゃない。

永きを生きていれば、国の滅亡や戦争など一時のよつて思える。有はいつか無に還る。

それは自然の理であり、何人たりとも覆せない撻もあるのだから。

が、しかし。

そうは思わないのが人であり、疑わしきは罰せよ精神は疑惑の中で膨らんでいくだろう。

「例えば、」

飽くまでも仮設だけど、と加えて、二人を見た。

「例えば、總統が暗殺だとして。誰がしたかは知らないけど、よからぬ何者かが手を下したとしてよ。手を下した奴は間違いなく下つ端だらうから、親玉がいるわけだよね」

「親玉……もしかして、」

「そいつが、次の總統になるかもってこと?」

ジタンの言葉に頷く。

「そしてまた例えば、そいつはもうろん暗殺者を探すよね。自分が犯人とは言わない

「どうやってそんな……」

「上層部なら真実は関係ないでしょ。どうせ皆、足の引っ張りあいなんだから」

イリッ・シユの息を飲む音が、『ぐぐ』と部屋に響いた。

「まあ、これは国内で済ませようとしたならの話。でも今のところ、

」

「戦争の準備をしてるとは聞かないな」

後三日もすれば国境だというのに、物騒な噂は總統暗殺だけだ。
あのおやつさんが知らないだけかもしれないが、大通りで出店して
いてそれは考えにくい。
アルジア国内がざわついている気配もない。

さつきの仮説は、悪くないと思つ。

「ちよつと単純過ぎじゃない?」

いまいち納得いかないのか、そう言つてジタンは首を捻つた。
それを笑い飛ばす。

「人間なんて、結局は単純なんだよ」

そう、残念なことに。

あのどんでもない悪女だつて、あたしに嫌がらせをしたいだけで國
を滅ぼしたりしたのだから。

ん？

「何か……」

「ワインズ？」

「…………ううん、何でも」

まさか、とばかりに笑って見せた。

風呂の順番を決めて、イリッショから順に風呂場を使うことになつた。

窓際に腰を下ろし、風が運ぶ音に耳をます。くわえた煙草には、ジタンが得意げに火を着けてくれた。

「だいぶ黒星石に慣れてきたね」

道中少しづつ力加減を調整しながら訓練してきたが、驚くほど飲み込みが早い。

黒星石に選ばれただけあって、相性がいいのだらう。

ただ、

「水系に弱いんだよねえ……」

ジタンはざぶがんばつても、水系魔術は上達しなかった。

しゅん、とへたれた耳に笑え、「だつて苦手なんだもん」と小さく呟いた。

真夜中。

ごそ、と動いた気配に田を覚ます。

ジタン……ではない、イリッショウでも。

風が僅かに、不穏な空氣を漂わせていた。

隣のベッドの中から、漆黒が闇を見つめているのがわかる。

ジタンは夜目が利くのだろう、ドア付近を睨んでいるようだった。

誰かが侵入してきたのか。

左隣のイリッショウも気づいたらしく、息を潜めているのがわかつた。

狙いは……。

「仕留めたりー！」

ざしゅー！という物騒な音より早く、あたし達三人はベッドから飛び出した。

「勘弁してよ」

そこには、どこの誰の覆面三人がそれぞれのベッドに三本の剣を突き刺さしている光景。

素早く戦闘態勢に入ったジタンとイリッシュは、律儀に、あたしの合図を待っている。

リーダーはあたしと「う」とらしこ。

物騒なことをしでかした割りに、相手は交渉といつ手段に出た。

「『ダーインスレイヴ』を渡せ」

「持つてないわ」

「はー?」

あっさりと返せば、あからさまに一人がたじろいだ。

「頭、持つてないって

「んなわけねえだろ!」

そうでしょうね。

一喝されたトト端Aは、「だ、騙すんじゃねえよ!」とか何とかかんとか。

「おとなしく渡せば、命だけは助けてやる」

過去、これを信じたばかたれがいたんだろうか。
暴挙をなした後で、流石に耳を疑う。

「ウインズ、どうするの？」

「捕まえるか？」

一人の言葉に、さて、と悩んだ。

早くも痺れを切らした輩は、剣を振り回して向かってくる。
ひょいひょいとそれを避けながら、うーん、と考えはまとまらない。

「殴っちゃダメー？」

「うーん……」

「捕まえよー！」

「うーん……」

どうも歯切れが悪い。

「狙いはわかつたんだけどねえ」
「どこ見てやがるー」
「あのかー」
「何だー！ しゃつ、こつら擦りもしねえー。」

いちいち答えてくれる頭は、完全に気が逸れていた。

だん！

素早く背後に回り、剣を持つ右手を足蹴にする。左手を後ろに捻じ上げれば、低く呻き声をあげた。

「どうしてあたし達が『ダーインスレイヴ』を持つてると思ったの？」

残る一人も取り押さえられて、またもや、頭は唸るしかなかつた。頭は唸つたまま黙り込み、もちろん、頭が喋らないので下つ端一人も喋らない。

「どうする？」

眉をひそめたイリッ・シユが、三人をぐるぐると繩で巻きながら言った。

ジタンに至つては、覆面を取り払つて顔に落書きをしあしてくる。

「おい、こいつをやめさせる！」
「お前、髭とか書くんじゃねえよ！」
「いいじゃねえか、エロ男爵みてえだぜお前」
「エロ男爵で嬉しいわけねえだろ！」

如血のむれへ喚いていたが、ひと睨みしたなら静かになつた。

「あの姉ちゃん、」ええな
「ええよ、頭をやりやがったんだぜ」

口男爵と下つ端Bが何か言つたけれど、聞こえない振りをする。頭の前に座つて田を合わせようとしたならそっぽを向かれたので、無理矢理こつちを向かせたら、ぐき、と嫌な音がした。

「痛えよー。」「氣にしないで」「氣にするだろー。」「いいから」

やんきやんといひやこな。

「ね、誰から聞いたの?」「……」

言わないうじい。

「う」とは、指図されたわけね

自分達だけで動いたなら、そつ言つはずだ。

少なくとも、盗賊の類いはそれなりのプライドがある輩が多い。何とも言わないとこらを見ると、雇われ者だと思われる。

「……いいわ。ジタン、イリッシュ、放り出しどいて」

「何で……！」

「いいから」

イリッシュに耳打ちをして、すぐさま、三人を窓から放り出した。どすん！と鈍い音がして、がさがさと植木から這いずる三人が窓から見える。

「頭、どうするんで！？」

「どうするって、どうもこいつもねえよー！」

「逃げるんですね！」

「あいつらに貸しあねえ、『ダーリンスレイヴ』はなかつたんだからな！」

まあ、手に入れていないのだからその会話に嘘はない。

切り込みを入れておいてやつた縄を解いて、すたこらと三人は逃げていった。

「あいつらって、俺達のことじやないな」

「みたいね」

イリッシュは闇を見つめたまま、額に手を当てる。

「手に入れられればラッキー。それくらいの気持ちはあいつらを寄せたってどこかな」

「誰かが？」

「そ、知っている誰かが」

または、それを『知った』誰かが。

それにしたってタイミングがよすぎると。イリッシュが『ダーインスレイヴ』を持って帰郷したのが最近。イシュバジル総統が暗殺されたらしいのも最近。そして、何者かが『ダーインスレイヴ』を狙っている。

風が耳元で囁いた。

どうやらあの夜盗達は、本当に雇い主のもとには帰らなかつたらしい。

誰とも会話をえしていない。

何はどうあれ、ここは割れてしまった。

「行くわよ」

早々に準備をして、宿屋を後にする。

イリッシュユ云々とか、話はそれだけではなくなつていた。

やつしてこんな面倒なことになつたんだ。

イシュバジル国

「す、す」「……」

最北の地イシュバジル国境南壁。

それを前に、ジタンは開いた口が塞がらないようだつた。

「……」はね、入国が厳しいので有名なんだよ

「これが国境なの？」

延々続いているような国境壁に、ジタンはひたすら、感動している。
さてどうじようかとほんやり眺めていれば、幾人かの国境兵が足早
にやって来た。

「恐れ入ります。『風の魔女』とお見受けしますが

「……」

嘘を吐いても仕方ない。

あたしの風貌は自分で言うのも何だが、なかなかに目立つ。

白髪に褐色肌なんて、いないとは言い切れないが、そういうわ
けでもない。

それに加えて魔力増幅石付きグローブに「如何にも魔術師です」的

ブースター

出で立ちでいれば、多少魔術を噛つた者ならすぐわかるものだ。

「明らかにあやしいけど……痛つ」

警戒心を顕わにしたジタンをげんじつで黙らせて、にじつと国境兵に微笑んだ。

「入国出来る?
「もちろんです」

すぐさま手続きに走つていった国境兵の一人が、お偉いさんに何か言つてゐる。

そしてあたしは、見逃さなかつた。

「お待ちしていましたよ」

彼らの一人が、そう口を動かしたことを。

かたかたと音を立てる木造の車輪に揺られながら、あたし達はミュートの街へと向かつっていた。

「姉ちゃん、魔術師なんかい?
「そうよー」

気のいい行商のおっちゃんは、へらへらと笑いながら話し掛けてくる。

荷台には大量の衣服が積まれていて、これからヨーロートの街に行く
そうなので、ついでに乗せていただいたわけだ。

「じゃあ何か、あれに参加しに来たのかい？」

「あれ？」

おっちゃんから買ったぬくぬくのコートに身を包みながら、ジタン
が首を傾げた。

「何やほれ、最近、イシュバジル總統がお亡くなりになつたらしく
でねえか。それでよ、今国で、魔術師を大募集中らしいでな」

「魔術師を？」

初耳情報に、イリッシュが身を乗り出す。

「詳しく述べ存知ですか？」

「いやあ、俺もなあ、最近この国に行商に来たばかりだからな
……噂でしか聞いたこたあねえんだが」

それでもおっちゃんが話してくれたところによると、イシュバジル

各地でその話題は持ちきりらしい。

何でも、大層な金額で雇つてくれるらしく、大勢の魔術師達が軍本部へ向かつたとか。

「でな、魔力試験みたいのがあるらしい」

「つまり、魔力レベルを測つているわけね」

「てことだらうな。自称魔術師なんかは、落ちたりもしたらしいけんぞ」

「ま、国がやるくらいだから、なかなか採用つてわけにはいかねえわな」と続けて、おっちゃんはからからと笑つた。

「ウインズが通れたのも、それのせいかなあ？」

ジタンは国境でのことが気になつてゐるらしい。

さあね、とだけ答えて、煙草から立ち上る白煙を眺めていた。

まる一日馬車に揺られて、リコートの街に到着したのはすっかり日が暮れてからだった。

「俺の知り合いんじに泊まつたついんだよ

おっちゃんはそう言つてくれたが、タダで乗せてきてもらひた上に
そもそもいかない。

お礼と言つわけじゃないがゴーグルを人数分買つて、お礼を言つて別れた。

「ヒヒがミコートの街か……ビーチュのいたラグト国とは違つね」「あそこは荒野と砂漠に囲まれた国だからね」

国境南壁から二一つほど街を行つたことは、深々と雪が降り積もる静かな街、ミユート。

北東に広大なイシュタリー山脈を遮るイシュタリー北壁を持ち、南には一ヌルタの森を抱える小さくも栄えた境街だ。

あの騒がしい魔女がよくこの街にいるなど……。

ドカ ン！

「……つぐづく思つてたんだけど、本当よく追い出されないよね

「師匠！」

爆音がした先には煙がもうもうとしており、雪と畳まつて辺りは真っ白だ。

イリッショウが駆けて行つた先には、見覚えのある家の一部が半壊していた。

「げつほ、げほげほ、まーた失敗しちゃ……あれ、イリッショウ！？」

這こするよつに出てきた茶髪紫瞳の彼女は、真っ白なままに驚いて田を見張る。

「と、えつー？ ウインズじゃない！」

彼女こそイリッショの師匠であり『氷の魔女』と呼ばれる田友イメールダ・トーヤその人だつた。

「やだもーイリッショだけかと思つてた！」

そういえばターニャが鷹を飛ばしてたつけな、じょんやり思ひ出す。

「ウインズ来てくれて助かつたわー！」

「そりゃそりでしうね」

半壊した壁をこんな時間に直してくれる業者がいるわけもなく、風の結界で応急措置をしたのはあたしだ。

外からまる見えだとイメールダが騒ぐので、見えないよつこもじてやつた。

ていうか、お前がやれ。

とも思つたが、しばらく泊めてもいいつもりなので、これは厚意と

いやつだ。

いそいそと湯気立つ紅茶を出しながら、腰掛けたイメルダがそれを啜る。

「で、何しに来たのよ？」

ぽかーん、としたあたし達に、「ちよつと?」といメルダは首を傾げた。

「ターニャから鷹来たんだよね?」

「來たけど

「何て?」

えー?と思いつ出すイメルダが、ああ!と手を打つ。

「イリッショ、豚足食べれないんだって!?しつかりしなさいよー

もー!

「……」

「豚足つて何ー?」

ターニャは何を送つてんだ。

膝足の説明をするイメリダとそれを聞くジタンは、どうやら気が合つてしまい。

「ジタンってこのー！あたしはイメリダ・トーヤー！有名な『氷の魔女』よ！」

「イメリダが『氷の魔女』なんだー。ワインズと友達なの？」

「何て言うか、弟子みたいなー！？」

しばらく放つておくれ」と云した。

深々と、雪は積もる。

この静けさに反して、何かが起きているのは確かだった。

イメリダがいつまでもジタンから離れないで、ジタンとイリッシュに夕飯を作らせることにした。

キッチンで忙しなく働く一人を横目に、ようやく本題に入る。

「イリッシュの魔力をもとに戻すつもりで来たの」

一瞬、目の前の顔が曇った。

「『ダーインスレイヴ』ね……どいままで聞いたの？」

基本的に声のでかいイメリダが普通のトーンだということは、彼女

にも思つといひがあるりこそ。

「あんたじゃ破壊出来なくて、イリッシュの魔力が吸収されたって
とこまでかな。持ってきたのは前イシュバジル總統」

「物も見た？」

「あなたの術が鞘と剣に上掛けされてるね」

些細な口論をしつつも共同作業をするイリッシュを一瞥して、イメ
ルダは溜め息をついた。

「悪いことをしたと思ってるの。でも、あたしにはあが限界だつ
た」

イメルダは攻撃的で高圧的だが、ばか正直で情に厚いことを知つて
いる。

イリッシュのことも、弟子として可愛がっていたのだらう。
現に、イリッシュもイメルダを師匠として慕つていた。

「ウインズの力で、どうにか出来ないかしら」

その言葉に首を振った。

「無理だね。風は石をも穿つ^{うが}けど、『ダーインスレイヴ』には特殊

な術が施されてる。新たに風で書き換えることは出来ない

「そうよね……」

頭を垂れて、その目は小さく揺らめく紅茶を見つめていた。
イメリダには悪いが、協力してもらわねばならない。

「（）に来る途中、アルジアの国境付近の街で襲われたんだよね。
『ダーインスレイヴ』を狙つてたらしげけど」

「えー？」

「雑魚だつたから平氣。ただ、何か思い当たることない？」

あたしはめどりも引っ掛けかる。

イメリダは黙つたまま、目を泳がせていた。

彼女はいわゆる『裏』と呼ばれる稼業をも請け負う魔術師であり、
裏には当然、公に出来ない物事が絡んでくるので守秘義務があるので
だ。

「あなたの立場もわかるけど、いろいろ気になる噂も聞いてね。例
えば……『總統暗殺』、とか」

ぴた、との視線が止まつたのを見逃さなかつた。

おずおずとこちいらに向けられる視線を絡め取る。
ようやく、その口が開かれた。

「……それを持ってきたとき、総統は言つたの。『狙われているから』って

イメルダは続ける。

「誰にとは言わなかつた、巻き込みたくないと言つてたわ。隠密に持つてきたものだから、早々に破壊して欲しいって。でも怖くて、なかなか実行出来なかつた」

「隠密に持つてきたはずが、どうして漏れたのか……いや、」

そこで区切つて、目を合わせる。

「ばれたから、殺された？」

イメルダのことだ、破壊時にはもちろん魔力が漏れないように魔法陣を張つたはず。

だが、ことは露見したのだ。

「代わりは渡したのよ！ わざわざドヴェルグ族と交渉してまで、手に入れたんだから！ 相当な目利きでも、偽物とは……！」

「ドヴェルグ族？ イシュバジル軍に殲滅されたって

その昔、イシュタリー山脈を棲み処としていた闇の妖精ドヴェルグ族。

イシュバジル国家建設時、脅威になり得るとの理由だけで、一方的に戦を仕掛けられ殲滅したとされる妖精一族だ。

あ、とイメリダはそれだけを漏らした。

どうやらそれもまた、守秘義務に入る内容らしい。

「見つけたわけか」

完全に肩を落としたイメリダは、大きく溜め息をついてから笑った。

「どうも『裏』は性に合わないのよね」

「だらうね」

それでも請け負うのは『伝説』と張りたいだけが、はたまた、ただのお人好しか。

ちなみにあたしは、ほとんど裏稼業はやらない。

血生臭いことは好きじゃないからだ。

それより優先すべき事柄があるから、とも言えるけれど。

「探し出したのはあたしよ、イリッシュは知らない。代わりを見たときなんか『こんな代物を持つてんなんて、流石師匠ですね!』って言ってたくらいよ」

イリッシュはびつも、ターニャよりイメルダに影響を受けているらしい。

イメルダが言つこは、ドヴェルグ族の生き残りはイシュタリー山脈にあるところある洞窟の入り口を守護し続けていること。見つけるのに大層苦労したらしく、代わりの代物にも一枚をはいたと苦笑した。

「もう行かないって約束したのよ」

「そもそもいかないんだよね」

「そ、そりだけど……」

そこでジタンとイリッシュが、いい匂いと共に夕飯を運んできた。どうやら今夜は、卵料理ではないらしい。

「弟子が可愛いでしょうが」

「俺がどうかしました?」

イリッシュに尋ねられ、イメルダは苦虫を噉み潰したような顔をした。

「そんなことが……」

ハビットライの手を止め、イリッシュ・シユは下を向いた。

自分のために黙つていてくれた師匠に、申し訳ないといつたところか。

「もうここのは。ビーフサウインズに黙つてるわけにもいかなかつたし……あんたがターニャのところに行つたつてことくらい、わかつてたわ」

てことはだ。

つまり、危機を察してイリッシュ・シユをここから逃がした、といつわけではないらしい。

「總統が死んだのはいつ?」

「一週間経つてないくらいよ」

イリッシュ・シユが歸宅したのと、ほぼ同じくらいか。

「どういひでや、イメールダ、家に強盗とか入らなかつた?」

「ああー。」

さつと向けられたフォークに、ジタンがびく、と肩を揺らした。

「あつたあつた！ちよつと前……一週間くらいかな？うつかり結界張り忘れて買い物行っちゃってー！でも、何も盗られてなかつたのよ。間抜けよねえ」

間抜けはあんただ。

イロッシュコドカえ、額に手を当ててうなだれてこる。

「それきつと、目的は『ダーインスレイヴ』ですよ、師匠」「えつ！？マジで！？」
「たぶんマジです」

さーつと齧やめたイメルダに、ジタンでせいで、やれやれとばかりに呆れた笑みを浮かべた。

「じ、じゅあ、もしかして……」

まだ何かあるのか。

「四日くらこ前なんだけど、軍の兵士に『最近お弟子さん見ないですね』って言われたのも……」

「何て答えた」

「ちょっと帰郷してますって……見ない顔だったんだけど、よく知つてるなって……」

あんた、本気で裏はやめた方がいいよ。

全て平らげてなお足りないらしにジタンにエビフライを一つ譲つて、話を戻す。

「イシュバジルが魔術師を集めてるってのは？」

「うーん……急なのよね。總統も決まってないのに、おかしいとは思うんだけど」

「決まってないのか。候補は？」

イリッシュが紙とペンを用意し、イメールダがそれに書き込んでいた。

「候補は三人いるわ、皆会つたことがあるから知ってるの。まずはジエンズ・アンフィ将軍。傲慢で攻撃的、かなりの直情型ね。ドヴエルグ族殲滅を指揮したのは彼の一派よ」

「そんな人總統になつたら、ドヴエルグ族が怒るんじゃない？」

「でしょうね」

ジタンの意見にイメールダが頷く。

「次はマリスカ・パティーン軍事文官長。議会で発言力があるらしけど、どうもする賢い感じがするわね。あたしは嫌い」

老いた狐顔だと、付け加えて笑った。

「最後はワーント・ハルティック將軍。彼は有望株よ。前總統の右腕で民衆の指示も厚い穩健派ね」

「その人がなるんじやないの？」

今のは話で考えたなら、ジタンの言ひことは最もだ。

ここ一十年ばかり大規模な戦争はない。

民衆は、國土拡大より毎日の生活が大切なのだ。

「と、思つじやない?」と云うが、魔術師召集の触れを出したのはアンフィ将軍なのよ」

なるほど。

「議会は?」

パティーンに発言力があるなら、足を引っ張るのが普通だ。

「どうやら、パティーンの賛成で形勢は逆転したらしいわ。だからやつてるのよ」

なるほどなるほど。

人間世界はいつの世も、同じようなものだと思つた。

食後の紅茶を啜りながら、煙草に火を着けて一旦休憩をする。

「どうする、ウインズ？」

「どうするって？」

イリッシュの言葉をそのまま返した。

「次期総統のことだよ」

そのことか。

「なるべき人がなるよ」

「放つておくのか?」

「まあ、今のところは」

さらりと返答したなら、イリッシュは困惑の表情を浮かべた。
隣のジタンは興味がないらしく、食後のお菓子で忙しい。

「師匠ー！」

話を振られたイメルダは、宥めるよつて話しだした。

「あたし達がビリーヴするべきじゃないのよ、イリッシュ」「どうしてですかー？」

まだ若い彼にはわからないのだろう。

『あたし達』がどういう存在なのかが。

そして自分もまた、そこに属しているところとも。

「明日はイシュタリー山脈に行く。異議は聞かない。以上

「ワインズー！」

客間に向かう間、あたしは決して、振り向かなかつた。

「……いつかわかるわ」

イメルダの呟きだけが、静かに鼓膜を打つた。

深々と曰

翌朝、納得いかないのか微妙な面持ちのイリッシュと、道中のおやつを手にしきうきなジタン、明らかに乗り気じやないイメリダを引き連れて、あたし達は出発した。

大抵の人はイシュタリー北壁を通つてイシュタリー山脈へ行くらしいが、イメリダいわく、現在北壁は魔術師を逃さないよう検問が厳しいらしい。

行きは揚々、帰りはこわい、てか。

「ただの魔女狩りみたいだね
「実際そうなのよ」

狩られるのは魔女だけではないけれど。

そんなわけで、目指すは「ヌルタの森だ。

ここを抜けて山脈へ行くのが、現状としてベストらしい。

が、

「そ、先に行つて！」

森の前で早速怖じ氣づく魔女が約一名。

「何なの」

「ここ、出るんだって」

怯えた目であたしを見つめてから、貧血を起こしたのか演技なのか、ふら、とイリッシュに倒れ掛かるイメルダ。

何なのあんた。

「師匠はオカルト系が苦手で」

「あ？」

魔術師がオカルト苦手って、本当に何なのあんた。

開いた口が塞がらない。

イリッシュは慣れているのか本当に心配なのか、やたらと労りを見せていた。

呆れ返つた態度が気に入らなかつたのか、あたしを指差してイメルダが叫ぶ。

「そ、そりゃあウインズはわ、こわいものなんてないでしょ？よ！風を操れるなんて、それこそもうオカルトみたいなもんだし！？普通なら聞こえない音とかも聞こえちゃうわけで！？何あんた、靈能者！？」

「魔術師だよ」

この能力で靈能者扱いされたのは、流石に、初めてのことだった。イメリダって、ある意味すげーと思つ。

オカルトに弱い魔女を中央に据えて、さくさくと道なき道を行く。アギズス森林と違つて一面真っ白なこには、瘦せた木々からときどき雪が落ちる以外、鳥の騒りも葉擦れの音もしなかつた。

「静かだな」

ほとんど人が立ち入らないのか、あたし達以外には誰もいないように見える。

「そりやあ出るくらいだもの。誰もいないわ
「だといいけど」

すっかり怯えたイメリダは、自然そのものを忘れきつているようだ。

人が立ち入らなければ、そこは動物達の領域となる。
どんなに過酷な状況下であろうと、共存の意味を知る動物達は順応するものなのだ。

もしかしたら、ジタンは大狼の方があよかつたかもしれない。

「ウインズ」

「どう?」

「ずっと見られてる」

森の途中からずっと警戒していたジタンは、周囲を観察しながらそう答えた。

やっぱっ。

とはいって、引き返すわけにもいかない。

風がないので、あたしが周囲を探ることも出来ない。

下手に風を起して、敵意があると勘違いされても困るのだ。

よつやく戻ったのか、イリッシュの顔つきも険しくなって
いた。

「後ビレーリにかしらねー? もー やだわー」

……イメールダ、しっかりしな。

がわつ。

そのとき、相手が動いた。

「止まれ」

どこからか声だけが、制止を求めた。
気配はする。

「皆、止まつて……」

「ぎゃああああ！何！？何！？何事！？誰なのー！？やだーもー！」

「……イメリダを黙らせて」

「師匠、失礼します」

「どす！」と鈍い音がして、辺りは静かになつた。
イメリダ、あんた出来た弟子を持つたよ。

「何故、森を行く

声は至つて冷静だ。

相手もまた同じ、警戒こそすれ敵意はない。

今のところは。

「イシュタリー山脈へ行きたいの」
「何故、北壁から行かない？」
「あそこで魔術師狩りに遭うから」

声が返つてこない。

じり出でぐる。

いざとなれば、土地勘はなくとも分はあるつもりだ。
伊達に二つ名持ちなわけじゃない。

がさ、がさ。

「名を聞こつ
「き、狐……？」

黄金色の毛並みに雪を纏つた彼に、イリッシュは驚いてせり漏らした。

「ウインズ・ゼロムス」

簡潔に答える。

彼は狐ではない。

彼は、ルンベ狐族と呼ばれる獣人族の一種であった。

一瞬、彼の瞳が鋭くあたしを射抜いたように思つ。
気のせい?

首を捻つたあたしをよそに、彼はジタンにこう言つた。

「よい主のようだ」^{あるじ}

ジタンが警戒を解き、周囲のそれも一斉に和らぐ。

そして、そこかしこから、わらわらと狐族が出てきた。

そして 。

「して、何故にこの寒空を山脈へ行くのだ」

氣絶したイメルダのこともあり、あたし達は狐族の里へ案内された。

人型をした彼は野性味溢れる中年男性であり、無精髭がよく似合つ
男前であった。

セダ・バイヨンと名乗った彼は、ここのはずの族長であるらしい。

「ドヴェルグ族に会いに行くんです」

「ほづ、して何故か?」

興味深くイリッショを眺め、すぐに視線はその背中へと移った。

「それが理由か」

イリッ・シユは静かに頷く。

そのとき、転がされていたイメリダが目を覚ました。

「……つたー。ちょっとイリッ・シユ、あんた師匠に何を……！？」

「お主が黙らねば、わたしは実力行使に出たかもしかつた。『氷の魔女』よ」

突然の言葉に、イメリダは完全に固まる。

現状把握が出来ていないらしいが、そのうちわかるだらうと放置するにした。

「がいかい外界をよく知ってるみたいね」

「知らねば生き残れぬからな」

隠れ里として魔法陣が張られているのも、獣人ならではの理由があるのかもしれない。

「出るつて噂は？」

あたしの問い掛けに、彼は笑った。

「出るなどとは笑えるだらう？死すれば土に還る、それだけだとう！」

「まあね」

イメルダを一警すれば、「だつて」と眩いで真っ赤になつてこる。まあ、魔術師があの騒ぎじやあ恥ずかしいわな。

「人間は見えないものに捉われがちでな、それを利用させてもらつてゐるに過ぎん」

つまりは構うなと。
そういうことなのだろう。

では何故、あたし達を?

「不思議そうだな」

口角を上げたセダは、あたしの気持ちを読んだかのようだ。

それはそうだ。

あたし達は魔術師、普通とは違えど人間でもある。
人間を嫌うつといふなら、姿を見せたりはしないはず。

「この子を連れていたから?」

ジタンに視線を投げ言つたなら、セダは柔らかく頷いた。

「それもある。^{ぬし}主は人狼だな」

「みたい」

「みたい、とは？」

ジタンの返事に、今度は彼が不思議そつだ。

「ジタンは記憶がないの」

「ほう……」ちらへ

素直にセダの前へ行つたジタンを彼はまじまじと観察した。

耳の先から尻尾、グローブから瞳まで。

右のグローブでその視線が止まる。

「左手のグローブもだが……これはまた、珍しいものを持っている
ブラックスター
黒星石のこと?」

首を振つたセダは、薬指の小さな石を指した。
エイツがお礼だとつけてくれた石だ。

「これは『ヴァラヴォロフの瞳』『人狼の瞳』といふ名の同族
を守護する石だ」

あたしはそれを知らず、イメールダを見たなら、彼女もまた首を振つた。

獣人には有名な話だとセダは続ける。

「それぞれ幾多の獣人族がいるが、そこのみに伝わる宝玉というものがいくつか存在するのだ。魔石と違い、それは同族のみに伝承される」

どうやらセダは人狼にも知り合いがいるらしい。

流石はビーチェや『宵闇の鬼』に名指しされるだけの武器職人。エイツのことを見直した瞬間でもあった。

運ばれてきた酒を煽りながら、セダはあたしを真っ直ぐに見た。

「その人狼の子だけではない。わたしは、お主の名を聞いて姿を現したのだ」

「あたし？」

嫌な予感がする。

「ウインズ・ゼロムス、白き髪と褐色の肌を持つ『風の魔女』。お主あの『白き魔女』の血縁であろう？」

的中だった。

イメルダは何とも言えない表情で黙し、ジタンはわけがわからない様子、イリッシュに限つては息を飲む音がはつきりと聞こえた。

「『白き魔女』って……あの、『白き魔女』？」

ようやく絞り出したような声で、イリッシュは震えながらあたしを見る。

首を傾げるジタンに、イメルダが小声で説明しているのを、視界の端で捉えて溜め息が漏れた。

そう　かのラジア・ゼルダが『伝説』と呼ばれるなら、『白き魔女』はさながら『悪夢』の象徴とでも言ひべきか。

『白き魔女』の悪夢伝説は数知れない。

どこかで国が崩壊すれば黒幕は彼女だと言われ、戦争が起これば彼女の仕業だと疑惑が浮上し、傾国の美女が現れると噂が立てば彼女だと囁かれ、悪人が権力を握れば立役者は彼女に違いないと皆口を揃える。

「……すごい人だね」

「そう、とんでもなくね」

ジタンの言葉に、イメルダまでもがうなだれてそう言った。

すごいのだ、冗談でもなくとんでもなく。
寧ろ、冗談ならどんなに救われたことか。

とにかく、悲しいかな、あたしの姉は間違いなく『白き魔女』だつた。

「お主は外見年齢二十五歳程度というところか。腹違いと聞いていたが、何と言うか、全く似ておらんな」

「唯一の救いでね」

隠すつもりはなかつたが、わざわざいつつもいつもなかつたことが露見して、何ともばつが悪い。
といふか。

「会つたことがあるみたいな言い方だけど

それはそれは悪名を馳せる姉ではあるが、実際、顔を見たという人物には会つたことがない。
何故なら、あいつに関わつた者は皆、もう土に還つているからだ。
土に還れるだけの欠片でも残つていたなら、それこそ、その者は恵まれた方じやないかと思つくらいだけれど。

あたしが生きている」と血体、あいつの気紛れに過ぎないかもしないことに、ときどき、やつとたえする。

セダはゆるりと黄金の尻尾を一振りして、口を開いた。

「少し昔の話だ。」この森を男を連れて抜けて行つたのを見たことがある

「男を？」

「ああ、金髪に鈍い灰色の瞳をした美男であつたよ。百年以上前だつたと思つたが」

知り合いにはいない男だ。

まあ、百年も前の悪事なら、現段階では気にしなくていいことかもしない。

最後にセダは、からかうように笑つた。

「『白き魔女』より、お主の方がわたしは美人だと思うがな」

……余計なお世話だつた。

〔冗談で少しほは雰囲気が紛れようかといつとき、数人の狐族がばたばたと入ってきた。

「族長、森にイシュバジル兵が。魔術師も数人連れています」

誰を　いや、何を追つてきたかは明らかな気がする。

『氣のせいならいいけれど……』

「客人を前に大変言ひにっこのですが、あの……どうやら『ダイ
ンスレイヴ』を探しているようだ」

そうはいかなかつたか。

どの程度の魔術師が来ているかわからないうちに、ここがばれる可能性
は否めない。

あたし達は完全に、お邪魔虫だ。

「失礼しようか」

「悪いな」

「うわちこわ」

匿つてもうつわけにはいかない。

また、セダ達もそのつもりはないに違いない。

立ち上がったあたしに、セダは、自らの首飾りを差し出した。

「餞別代わりにこれをやろ」

ティアドロップ型のそれは透き通るほど透明度を保ち、僅か七色
に光っている。

「これは？」

「『透石』と呼ばれ、代々一族に精製法が伝わる宝玉だ。一人程度なら姿を隠してくれよう」「いいの？」

受け取つたあたしに、セダは面白がつけていた。

「わたしは『白き魔女』が嫌いでな」

つまりはそれが言つたかったのかもしれない、そんなことを思った。

「同感だね、あたしもだよ」

過去と狐と黒幕

ひたすらに積もつて雪の向こうに、ぱらぱらと人影がちらついていた。

追っ手は思ったより早く近づいていたらしい。

「あたしとジタンで何とかするから、一人はこれで先に山脈へ」

こんなとき、転移術が使えないことを悔やむが、あれを使える者などそうそういないのだから仕方ない。

「山脈へって……散り散りになつたら集合出来ない」

透石を受け取りはしたが、イリッシュは納得いかない様子だった。

「ジタンがいるから何とかなるよ」

「……たぶん」

何となく歯切れの悪いジタンに田配せしたなら、状況を読み取ったのか、今度はしっかり頷いて見せた。

足跡は流石に消せないだろうが、目視出来ないだけでも現状はかなり変わるはずだ。

「いざとなれば、イメールダが何とかするだらつ……たぶん。ここは、彼女の手腕に期待するしかない。

里の結界から隙を見て、狐族の案内で上手く人気のない場所から先立つ一人を見送った。

そしてまた、後方になちらつく人影に向けて風を巻き上げる。本当ならあたし達も上手く逃げてもいいのかも知れないが、囮になつた方が時間稼ぎくらいにはなるだろう。

ぶわっと起つた突風に数人が立ち往生しているのが、結界内から見てとれた。

「行くよ、ジタン」
「うん！」

ぼふん、と大狼に変化したジタンに飛び乗り、勢いよく外界へと飛び出した。

「期待しているぞ、『風の魔女』よ

そう呟いたセダの言葉も真意も、今のあたしはまだ知らない。

「いたぞ！」
「あちらだ！」

方々からそんな声が聞こえて、さりげなく手を引くよりは当然たらずとも遠からずな攻撃を仕掛けていった。

犠牲者を出したいわけじゃないぶん、何とも加減が難しい。

適当にあしらうのが一番だが、こっちが本当に適当にしていくことがばれたなら、他の追っ手があの一人を探しに行ってしまうかもしれないのだ。

そう、あたし達二人に集中してもらわねば。

「ジタン、炎とか吐ける?」

「ご丁寧に大狼サイズに変化している右手グローブに視線を投げたら、「たぶん!」と曖昧な返事が力強くされた。

「たぶんて何
「この姿でやつたことないよ
「あ、そつか」

だが、しかし!
そこは流石のジタン、後方に向けて鮮やかに色づく赤を吐き出して見せた。

流石だと唸るしかない。

雪上に一直線、燃える痕跡を残してやれば、わらわらとそれに人影がまた群がつていく。

何人かが巻き込まれたらしく声が上がるが、大したことはなく、連れの魔術師が水系魔術を施行しているのが見てとれた。
ばしゃあつと勢いよく真上から水を掛けられて……そっちの方がよっぽど拷問じやなからうかと思ったのは、あたしだけだろうか。

と憐れみの視線を向けていたなら。

ガシャガシャガシャキ　　ン！

「ウインズ、あれ！」

雪原を走り抜けるジタンの声に、視線を前方へと戻し、舌打ちが口を突く。

「イメルダ……あんのばか！」

木々を遙か越え粉雪を撒き散らし、そこには見事、巨大なる氷柱が幾重にもなつて空を貫かんばかりに出現していた。

イメルダが『氷の魔女』と呼ばれる由縁は、雪深き北の地を好むからだけではない。

水術系高等魔術である氷術系魔術を得意とし、魔力消費の激しいそれを惜しげもなく遺憾なく、迷惑を顧みずところ構わず使いまくる

からだ。

魔術師は大抵、元ある魔力を消費し老いていく消費型と、食物摂取や休養などで魔力回復が可能でありいつまでも外見は老いることのない持続型とに分かれる。

イメリダはまさに後者であり、食欲も半端ない上、元ある魔力 자체もまた半端ない。

よつて彼女は得意な氷術系を惜しげなく使用し、疲労速度も群を抜いて高いのだ。

ガシャ
ガキ
ン！
ン！

……またかよ。

何とか風を巻き上げ、炎で誘き寄せ、をやつているにも関わらず、追っ手はさつきより明らかに減りつつある。

そのぶん、前方の巨大氷柱は増えていくわけで。

「姿を隠してて、イリッシュがついてて、それで何でばれちゃうわけ？」

「目立ちたがりなのかなあ」

否と言えないところが痛い。

イリッシュでは、ストッパーとしては弱かつたか。

「いたゞ、『氷の魔女』だ！」

「追え！弟子もきつとそちらこいるはずだ！」

「ほひらの奴らは如何しましょつか！？」

そんな声が飛び交い、流石イメルダ地元で有名だね、とか呆れつつ思っていたなら、

「雑魚は放つておけ！行くぞ！」

ひとことが、ぴき、とあたしのこめかみを刺激した。

何だとう！？

ぴきき、と青筋が走るのがわかる。

それに伴って、ジタンに動搖が走った。

「ウイ、ワインズ？ビッシュ」

「……見せてやろうじゃない。ねえ、ジタン

「ウイ、ワインズ……？」

あたしだって、伊達に一つ名持ちじゃない。

あの悪女の妹という事実を知る者は少なく、實際、ごく僅かなものだ。

現にあいつと姉妹であることが有名だったなら、あたしはさながら

『黒き魔女』または『褐色の魔女』とでも呼ばれていただろ？

悪役みたいだけれど。

しかしあたしは 『風の魔女』と呼ばれる。

それがどういふことか。

そこら辺を走り回っている魔術師との格の違いを！
伊達に永年『生き抜いている』わけじゃない実力の差を！

「今こそ見せてやらないでか！ね、ジタン！」

「あ、え、う、うん？」

いまいち的を射ないジタンの背中に後ろ向きに座り直し、こめかみに走る青筋はそのまま、後方に向かって雑魚と呼ばれたことに對しての怒声を上げた。

伝説の魔銃『ヴァーグ』を構えて。

「我、『風の魔女』なり！雑魚呼ばわりを後悔するがいーいーわ

！」

ドオオオン！

「……」

「……」

「ヌルタの森に、一瞬にして、大規模な街道が開通した。

としか、言えなかつた。

「……ウインズ、開拓業界の風雲児になれるね」

「……上手い」と言つね

上手いこと言つてる場合かどうかは置いとくとして。
吹き飛ばされた追っ手は大丈夫だらうか。

他人事のように、はらはらと巻き上げられた雪が舞い散る雪原で、
そんなことを思つた。

これ……使うときは、気をつけよう。

一人して遠い目をしていたなら、轟音につられたのか、追っ手の人
数が戻ってきた気がした。

「おい、聞いたか！？」
「『風の魔女』だと！？」
「どうする！？」

ふん、恐れ入つたか！

「『白き魔女』殿に連絡を。」
「…………」
「…………『白き魔女』だつて。あのとんでもなくへんべでもないつていう、悪女のお姉さんじゃなー?」

ね?と場にそぐわないほど可憐にしう首を傾げたジタンの適切で丁寧な説明に追撃を受け　あたしの中で、何かがぶつりん、と、切れた。

『白き魔女』。
『白き魔女』殿?
『殿』ですって?
あいつが黒幕か!

「あ……えと、ウインズ……!あの、えっと、落ち、落ち着いて

ひゅう、と風が鳴く。

それは渦となり、あたしを中心取り巻くように強く唸る。

「やばい!」「逃げろ!」とか何とかかんとか。

聞こえたけれど聞こえない。
聞いてやる気はない。

あんた達は一人も逃がさない。

「ジゼルはどう?」

自分でも底冷えするような声が、腹から這いずるように口を突いた。慌てた誰かが放つたらしに無数の炎の矢を、指一つ動かさずに風で吹き払う。

「もう一度言う。ジゼル・ゼロムス　『白き魔女』はどうしている?

ジゼル・ゼロムス　それが、悪女であるあいつの名前。
あたしと血を分けた腹違いの姉の名であり、何より　あいつ自身
が引き裂いたあいつの母親の名でもあった。

覚えているのは、温かい手。

『白き魔女』の母親は、悪女の素質を生まれながらに兼ね備えていたあいつと違い、優しく慈悲深い魔女だった。

天使のような優しい笑顔と金色のウェーブした髪、真っ白な肌と金色の瞳はそつくり娘に受け継がれていたが、心根は真逆であったのが残念でならない。

彼女は母親の違つあたしにもそれは優しく、ろくでもない女つたら
しな父親をとても愛していた。

だからあたしは、実母でなくとも彼女がすきだつた。

覚えているのは、温かい手。

温かく、彼女自身の生温かい血に染まつた真つ赤な手。

それは、あいつがあたし達のいた国を滅ぼしたとき、ついでとばか
りに殺した彼女……あたしにとつての『ジゼル・ゼロムス』の最後
の温かさ。

何百年経とうと忘れない。
何百年と追い続けてきた。

あの悪女『白き魔女』が、今、この国を搔き回している。

「あいつは何をしようとしているの？」

逃げ惑う追つ手を風で囲い込み、あたしは一步、前へ出る。
一步、奴らが後退したのがわかつた。

「 ズ、ウインズ！」

ジタンの声が聞こえない。

鼓膜を震わせるだけで、何も聞こえない。

あいつがいる、あいつがここにいる、あいつが、あいつが。

あいつが、

「荒れているな、『風の魔女』よ」

はつとした。

我に返つたあたしの前に、黄金色の狐がふるりと尻尾を一振りし、いつの間にか佇んでいた。

「……セダ……何してんの？」

「正気になつたか」

ふわり、と取り巻く風が拡散し、優しく消えた。

そもそも、あたしの作り上げた風の障壁を突破してきたセダに、ぽかんと口が間抜けに開く。

いや……本来、獣人族は自然と共に存している種族。

彼もまた、風に少なからず愛された者なのかもしれない。

「ここは我らの森。いくらお主であろうと、これ以上破壊活動に勤しまれでは、狐族の長としてわたしが困るでな」

「ああ……」めん

言葉とは裏腹に、何故か彼は楽しそうに見えた。

あたしを見るその目が、そういう色を含んでいた。

不思議そつにセダを見つめているうち、追っ手は勢いを取り戻したのか、取り敢えずとばかりにこちらに突っ込んでいた。

「ウインズに楯突くなら、俺は許さないよ」

くあつと口を開けたジタンが、今度は、容赦なく炎を吐きつける。あ、といつまでもなく駆け出したジタンは、向かってくる敵をものす「」に速さで、それはもつまことに蹴散らしていった。

「ふむ」

何をするでもなく、そんなジタンを眺める黄金色の狐は、一つ、空に向かつて遠吠えをして見せた。

何を……？

手を出す必要もないかと、敵を次々伸していくジタンを遠目に捉えながら、あたしは訝しさから首を捻る。

そんなあたしをセダはまた、あの目で見返してきた。

あの、楽しそうな……如何にも興味深いと言わんばかりの目で。

「気に入った」

「は？」

「お主が気に入ったと言つたのだ。『風の魔女』いや、ワインズ・ゼロムスよ」

意味わからん。

やつぱり訝しむあたしを余所に、獣達の足音を風が運んでいた。

手出しませしないつもつだつたんじやないのか。

ところあたしの思考に構つことなく、障壁の向ひに集まつてくる狐族達。

一様に向けられるのは「卑く」^ひされを除け^の、「貴わんばかりの彼らの団^団」

「そんなに閑わりたくなかつたんじやないの？」

未だ暴れまくるジタン^ヤがうつかり殺つちやうじやなかうつかと心配しつつ、ゆつたり構えるセダに問ひ掛ける。

まあな、と言いながらもやる氣満々な彼を一警してから、ぱり、と指を鳴らした。

風の障壁が消える。

と同時に、残つた緩い風を斬るよつとして、狐族達は、一齊に追つ手に襲い掛けた。

「いいの？傍観者だつたんでしょう」

「まあな。いいだろう、わたしはお主が気に入つたのだから」

ビービリ辺が？

聞いたなら答えてくれるのだろうか。

思慮深く見えた彼は、今やまるで若者のように田を輝かせ、あつと
いう間に戦闘に加わってしまった。

体格も暴れ具合も虎の如き大狼ジタンと、その周りでビコか楽しげ
な 一回り小さなサイズの狐達。

一回り小さいと言つたつて、普通の狼の倍くらいはあるけれど。
飽くまでもジタンより小さいに過ぎないので、現場の迫力は計り知
れない。

追つ手の顔が若干怯えて見えるのは、まあ……当然だよね。

少しずつ少しずつ、中心に集められていた追つ手を取り囲んだかと思
えば、一斉に、狐族が高らかに吠えた。

ぱつ、と追つ手が消える。

暴れ回っていたジタンだけを綺麗に残して。

「え……何事？」

初めて見たそれに、あたしはぽかーん、と、口を開けて呆けてしま
つた。

「我々は代々、イシュタリーのドヴェルグ族と親交があつてな」

「転移術だ。しかも、かなり高等の。ただ、あたしの知っているものと違うのは、遠吠えだけで転移したこと。」

「一斉に吠えたことが、詠唱の代わりということなのだろうか。あの吠え方に、詠唱呪文は混じっていなかつた。」

「あたしだつて伊達に永きを生きているわけじゃない。永きに伴つて、それなりの知識はある。」

「あれが狐人族含めその古代言語でないことくらいは、わかるのだ。」

「初めて見たか？」

「……うん……」

「見事だろう」

呆然として頷いたあたしに、未だ狐のまま戻ってきたセダが、満足そうに胸を張りながら雪を振り払つた。

「これは狐人族でも、我々ニヌルタの者にしか出来ん」

「ニヌルタの者にしか。」

「ニヌルタの一族代々に伝わる術ということだろうか。」

「え！？」

「まあ聞け」

さくさくと歩き出した大狐の後を、同じく、ぽかんとしながら寄つてきたジタンと共に歩いて行つた。

「我々はイシュバジルの民を好いておらん。ドヴェルグ族殲滅に意味があつたとは思つていないのでな。人間は勝手だ。万物の頂点は、自分達であると傲慢にも思つてゐる」

何も言えなかつた。

事実、生態系ピラミッドの頂点は自分達であると、少なからず人間は思つてゐるに違ひない。

「あの殲滅……関わつていたのは誰だと思うか」

「誰つて……聞いた話だと、今のイシュバジル將軍の地位にあるジエンズ・アンフィつて人の『先祖』だつて」

「まあ、間違いではないな。率先して攻め入つたのは、あやつの先祖だが、」

「違うの？」

あたしは当時、この国付近にいなかつたので、ことの詳細に詳しくない。

セダの話し振りからして、まだ何かがありそつた。

「裏にいたのは、お主のよく知る人物だ」

「あたしの……！？」

息を飲んだ。

あたしのよく知る人物。

セダの話し振りや、今までの『風の魔女』に対するこだわり様。

まさか

「……あいつか！」

あたしの頭で、金髪金瞳の絶世なる美女が、高笑いをした。

が、その幻影をこなぐそとばかりに蹴散らす。

あいつ、あいつはどうしてこう、何十何百いや何千と悪事ばかりを働くのか。

そのうちの一回くらいは善き行いと言えるような何かをしてくるのか

否、それは残念なことに、思い当たることはない。

むしろ、あいつがそんなことをしている場面が、誠に残念なことに全く思い浮かばない。

……似合わない。

「ねえ、ウインズ」

「……何」

「ひょー」と場違いなほど可愛らしく首を傾げて、ジタンはまた、ずばん！とあたしに直球を投げた。

「美人で何しても何とか生きてられるんだねー」

「ジタン、それは彼女には言つてはならない」

「痛感しているのだから」まで言わなかつたセダを讃めてやりたい。そんな気持ちで、隣にあつた木を二本ほど、風で薙ぎ倒した。

それはそれとして。

「つまりだ。ろくでなしがこの国のろくでなしな誰かを唆したんだか騙くらかしたんだか寝落としたんだかして、現状がある　て可能性があるわけね」

「可能性はなきにしもあらず」

「だよね。現に『ダーインスレイヴ』が狙われてるんだから」

あいつは魔剣『ダーインスレイヴ』で、一体、何がしたい？

足を止めることがなく考え込んでいたなら、すぐ先にまた、巨大な氷柱が何本か追加された。

騒ぎ立てながら氷柱で森を荒らすイメルダを思い浮かべ、長く息を

吐く。

白く色づいたそれを見つめていたセダが、ゆるりと黄金の尾を振つた。

「どうする」

「どうするって、やるしかないしゃりせむつもじなんじょ

「まあな

場違いにも穏やかに細められた焦げ茶の瞳には、しつかりとあたし
が映つていた。

そう、始めからこの狐族の長はそのつもりだったのだ。
そのつもりで姿を現し、そのつもりで透石を『え、そのつもりで助
け船を出した。

ジタンがあたしの複雑な胸中に共鳴したのか、ひたとセダに一瞥く
れる。

すぐさまあたしに向けられた視線は、あまり穏やかではなく、剣呑
としていた。

「ワインズやりたくないなら、俺、倒してくるよ

何をだ。

ジゼルか、セダか、はたまたこの国を引っ搔き回している先鋒か、
下手したらイメルダなのか。

どれにしろ、今、それはよろしくない。

この子はいろいろな意味で素直だから、やれと言つたらやるだらう。

危ない！

本当にやりかねない！

「やるよー！」

「わかった。わかったからくつつかないでジタン」

いつの間にか、さあさあさあと涙田で抱きつこうぐるへたれ耳の彼に、また小さく息を吐いた。

「……あんたの誘いに乗るかな」

「それが賢明だな」

少なくとも、いいではね。

それは飲み込んで、増加の一途を辿る氷柱に向かつて駆け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2730p/>

I.o.method

2011年6月17日17時17分発行